KYUSHU NATIONAL MUSEUM

福岡県教育委員会・大韓民国 国立文化財研究所 交流20周年記念

九州国立博物館 国際シンポジウム

六六三年、白村江での敗戦を契機にして
筑紫には大野城・基肄城などの
古代山城が築城された。
近年も新たに古代山城の発見が相次いでいる。
今回、日韓の研究交流20周年を記念し
これまでの研究を振り返りながら
古代山城の謎に迫りたい。

日韓の古代山城を掘る

こだいさんじょう

大宰府政庁跡より大野城を望む

日時／2006年3月11日[土] 10:00−17:00

会場／九州国立博物館 1階 ミュージアムホール

主催／九州国立博物館、大韓民国国立文化財研究所

後援／文化庁、駐福岡大韓民国総領事館、(財)九州国立博物館振興財団、九州国立博物館誘致推進本部、福岡県教育委員会

福岡県教育委員会・大韓民国 国立文化財研究所 交流20周年記念

九州国立博物館 国際シンポジウム

日韓の古代山城を掘る

プログラム

9:30　開場

10:00　【記念講演①】韓国の遺跡を掘る－ 古代山城を中心に
金 正基（キム ジョンギ）（元大韓民国国立文化財研究所長）

11:00　【記念講演②】日本の遺跡を掘る － 古代山城を中心に
小田 富士雄（おだ ふじお）（福岡大学名誉教授）

11:50　休憩

－シンポジウム－

13:10　【報 告 ①】扶余と扶蘇山城（プヨ　プソ）
金 容民（キム ヨンミン）（大韓民国国立文化財研究所遺跡調査研究室長）

13:50　【報 告 ②】日本の古代山城 － 北部九州を中心に
向井 一雄（むかい かずお）（古代山城研究会代表）

14:30　休憩

14:40　【報 告 ③】韓国の山城最新発掘調査成果について
朴 鐘益（パク ジョンイク）（大韓民国国立昌原文化財研究所学芸研究室長）

15:20　【報 告 ④】日韓の古代山城 －類似点と相違点－
亀田 修一（かめだ しゅういち）（岡山理科大学教授）

16:00　休憩

16:10　【討　論】日韓の古代山城を掘る
【聞き手】赤司 善彦（あかし よしひこ）（九州国立博物館展示課長）

17:00　閉会

ごあいさつ

九州国立博物館国際シンポジウム「日韓の古代山城を掘る」を開催するにあたり、御挨拶申し上げます。

九州国立博物館は韓国と一衣帯水の地にあって、古来より対外交渉の拠点となった太宰府市に位置しています。国と福岡県が一体となり「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」という基本コンセプトに基づき、我が国の文化の形成に影響のあったアジア諸国との文化交流の歴史を広く扱う博物館として、昨年10月に開館いたしました。

ここ太宰府の地には、その対外交渉の中枢を担った大宰府政庁や古代山城である大野城が位置しています。そのため、九州国立博物館で今回のシンポジウムを開催することは大変意義深いものと考えます。

さて、福岡県教育委員会・九州国立博物館誘致推進本部は1986年から大韓民国国立文化財研究所と毎年、相互交流を行ってきており、今年は交流20周年という記念すべき年にあたります。

とりわけ、今回のテーマである古代山城は、これまで日韓相互の研究対象とされることが多く、我が国の歴史を考える上で非常に重要なものです。

今回は日韓の古代山城研究に携わる先生方をお招きして、討論を行い、今後の日韓の共同テーマとしての課題を展望するとともに、その成果を展示をはじめとする博物館の諸活動に活かそうとするものであります。

最後になりましたが、今回のシンポジウムの開催にあたり、御協力いただいた先生方をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、博物館の発展のために、皆様方のより一層の御理解と御支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

平成18年3月11日

主催者

記念講演①

韓国の遺跡を掘る—古代山城を中心に—

金　正基

元大韓民国国立文化財研究所長

Profile

キム ジョンギ 김 정기

1930年生まれ

国立博物館考古課長、国立文化財研究所長を経て、翰林大学校教授

1987「発掘を通じて見た慶州の新羅古墳」『朝鮮学報』天理大学

1984「弥勒寺塔と定林寺塔」『考古美術』韓国美術史学会　など

解放後、韓国で発掘調査が実施されたのは1946年国立博物館による壺杵塚と銀鈴塚であり、その後若干の発掘があったものの、ごくわずかであった。1959年末に感恩寺址の発掘をはじめとし、60年代には国立博物館と大学博物館による遺跡発掘がしばらくの間続いた。70年代になり、慶州開発事業の一環として、天馬塚をはじめとした古墳とさまざまな遺跡の発掘が国家事業として進行し、各種開発事業による建設工事の用地発掘が急増。文化財研究所の前身である研究室とさまざまな大学博物館がこれに当たった。80年代になると既存の発掘機関だけでは対応することが難しくなり、各地域に埋蔵文化財発掘を専門に行う機関が、地方行政機関や関係大学教授による財団法人として続々と組織され、これら緊急発掘を担当した。例をあげるなら、2004年の発掘許可が999件、発掘専門機関は82箇所である。このような状況から問題点も出てきた。急増する発掘遺構、遺物の整理と総合的研究がこれに伴わない点、発掘担当者の相対的な質の低下などである。これらを解決するためには、発掘要員の再教育・訓練が求められ、文化財調査研究を主業務とする国立文化財研究所の役割が重要になってきており、併せて日本のさまざまな関係機関、特に韓国との文化的関連が深い福岡県など、各地方機関との緊密な交流が大きな力になると信じられる。

山城遺跡はその立地的条件のために、産業開発における建設工事の対象とはならなかった。しかし、「88ソウルオリンピック」を契機として、夢村土城が発掘を通じて整備され、この時期から地方行政機関による山城保護と観光資源化を目的に、さまざまな山城が調査された。しかし、遺跡の立地と規模など城郭全域の調査は難しく、城壁の主要部分や門跡の調査に留まる場合が多かった。

韓国内の山城で高句麗関連遺構が確認されたことは、峨嵯山一帯の山城と京畿道の徳津山城、隠垈里土城などで明らかになり、清原南城谷など忠清道でも確認された。

百済山城は初期には版築の土築城が多く、後に石築城で改築されることが多かった。公山城や扶蘇山城がその代表である。公山城は城内の平地が発掘され、大規模な建物跡と方形の溜め池が発見された。扶蘇山城は80年代から今まで調査が継続され、多くの遺構と遺物が発見され、羅城の実態も明らかになりだしている。河南の二聖山城も数年におよぶ発掘で、城内から八角建物に似た建物跡が発見され、貯水池遺構からは木簡も発見された。

新羅山城はすでに、慶州の多くの山城と咸安城山山城、昌寧牧馬山城、報恩三年山城、聞慶の姑母山城などが全域で確認されている。

このような城跡は『文化遺跡総覧』に2,000余箇所も登載されているが、まだ知られていないものも少なくないと考えられる。こういった遺跡はこれからも徹底した保存と明確な目的意識の体系的な調査により、その歴史的意義と地域間の特性との関連を明らかにすることができ、無限な学術的価値を有していると大きく期待されている。

（翻訳：水ノ江 和同）

韓國의 遺跡을 파다 - 古代山城을 中心으로

解放後 韓國에서 發掘調査가 實施된 것은 1946 年 國立博物館에 의한 壺杅塚과 銀鈴塚이었고 그 뒤 몇몇 發掘이 있었으나 극히 微微한 것이었다. 1959 年末에 感恩寺址發掘을 시작으로 60 年代에는 國立博物館과 大學博物館에 의한 얼마간의 遺跡發掘이 있었다. 70 年代에 들어 慶州開發事業의 一環으로 天馬塚을 비롯한 古墳과 여러 遺跡의 發掘이 國家事業으로 進行되고 各種 開發事業에 의한 建設工事에 따른 用地 發掘이 急增하여 文化財硏究所 前身인 硏究室과 여러 大學博物館이 이를 擔當하였다. 80 年代에 들어서 旣存의 發掘機關 만으로는 勘當하기 어려워지자 여러 地域에 埋藏文化財發掘을 專擔하는 機關들이 地方行政機關이나 關係大學敎授들에 의한 法人體가 續續 組織되어 이들 救濟發掘을 擔當하게 되었다. 例컨대 2004 年의 發掘許可가 999 件이며 發掘專擔機關은 82 個所이다. 이러한 狀況에서 問題點도 드러났다. 急增한 發掘遺構, 遺物의 整理와 綜合的 硏究가 이를 뒤따르지 못하는 점, 發掘擔當者의 相對的 質의 低下 등이다. 이를 解決하기 위해서는 發掘要員의 再敎育 練修가 要求되며 文化財調査硏究를 主業務로 한 國立文化財硏究所의 役割이 重要해졌으며 아울러 日本의 여러 關係機關과 韓國과 文化的 關連이 깊은 福岡県 등 여러 地方機關과의 緊密한 交流가 큰 힘이 될 것으로 믿어진다.

山城遺跡은 그 立地的인 條件 때문에 産業開發을 위한 建設工事의 對象이 되지 않았다. 그러나 「88 서울올림픽」을 契機로 夢村土城이 發掘을 통해 整備되었고, 이 時期부터 地方行政機關에 의해 山城保護와 觀光資源化 目的으로 여러 곳의 山城들이 조사되었다. 그러나 遺跡의 立地와 規模 등으로 城郭 全域의 調査가 어려워 城壁의 主要部分이나 門址의 調査로 그치는 경우가 많았다.

韓國內의 山城에서 高句麗 關連 遺構가 確認된 것은 서울 峨嵯山 一帶의 山城과 京畿道의 德津山城, 隱卓里土城 等이 밝혀졌고 淸原 南城谷 등 忠淸道에서도 確認되었다.

百濟 山城은 初期에는 版築의 土築城이 많았고 후에 石築城으로 改築되는 것이 많았다. 公山城이나 扶蘇山城이 그 代表的인 것이다. 公山城은 城內 平地가 發掘되고 大規模 建物址와 方形의 留水池가 發見되었다. 扶蘇山城은 '80 年부터 지금까지 調査가 繼續되어 많은 遺構와 遺物이 發見되었고 羅城의 實態도 밝혀져 나가고 있다. 河南의 二聖山城도 數年에 걸친 發掘로 城內에서 八角建物을 비롯한 建物址가 發見되고 貯水池 遺構에서 木簡이 發見되기도 했다.

新羅 山城은 일찍 慶州의 여러 山城들과 咸安 城山山城, 昌寧 牧馬山城, 報恩 三年山城, 聞慶의 姑母山城 등 全域에서 確認되고 있다.

이와 같은 城址는 「文化遺蹟總覽」에 2,000餘個所나 登載되고 있으나 아직 알려지지 않은 것도 적지 않을 것으로 생각된다. 이들 遺跡은 앞으로도 徹底한 保存과 뚜렷한 目的意識下의 體系的인 調査로 그 歷史的 意義와 地域間의 特性과 關連을 밝힐 수 있는 無限한 學術的 價値를 갖는 것으로 크게 期待되는 것이다.

記念講演②

日本の遺跡を掘る—古代山城を中心に—

小田 富士雄

福岡大学名誉教授 文学博士

Profile

おだ ふじお
1933年 福岡県生まれ
九州大学大学院博士課程修了
別府大学文学部助教授、北九州市立考古博物館長を経て、1988年から福岡大学人文学部教授に就任。
2004年3月に福岡大学を定年退職。
現在、福岡大学名誉教授。文学博士。
1990『九州考古学研究〈文化交渉編〉』学生社
1993『倭国を掘る—地中からのメッセージ—』吉川弘文館 など

明治・大正・昭和三代にわたる神籠石(こうごいし)論争も1963年のおつぼ山神籠石調査を嚆矢として山城に決着した。一方、664年に始まる「天智紀」(朝鮮式)山城の調査や、あいつぐ神籠石系山城の新発見と調査によって、現在、前者6城、後者16城の遺跡が北部九州・瀬戸内・近畿にわたって確認されている。

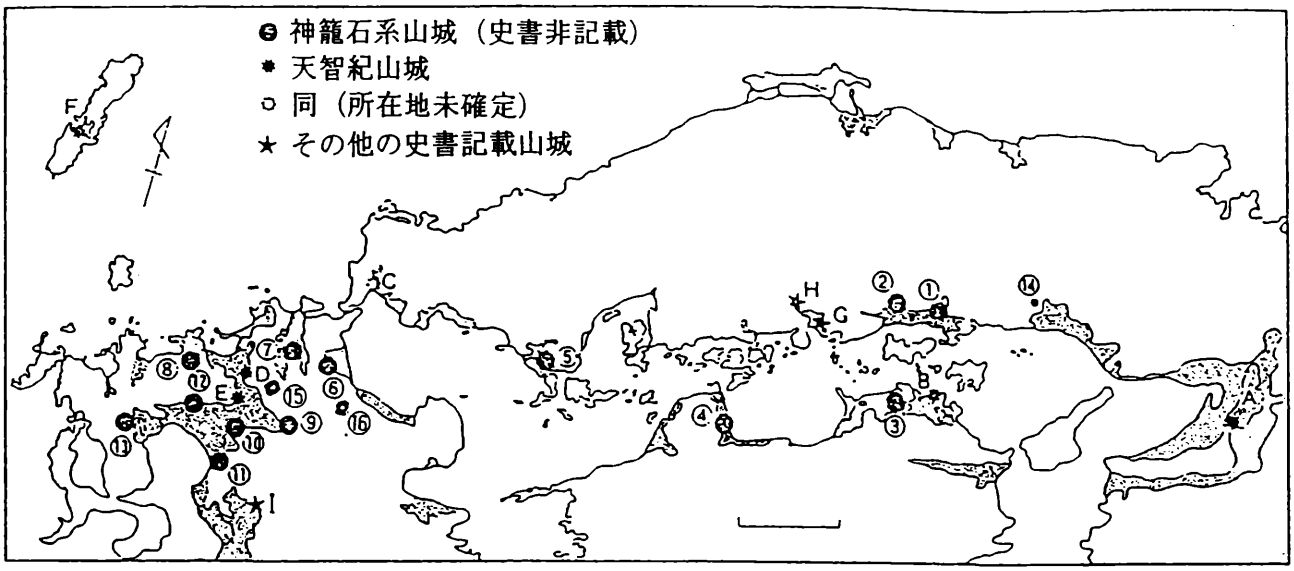
朝鮮式山城は、663年の白村江の戦いに大敗し、唐・新羅連合軍の進攻に備えて緊急に防衛体制を整備する必要に迫られた築城で、百済の亡命高官の指導によるものであったから、百済の故都扶餘に残る泗沘都城や扶蘇山城と、大宰府都制や大野城との比較研究がはやくからすすめられてきた。『日本書紀』などの記載によれば、西日本の山城は670年頃までに築城を完了し、以後700年頃までは修繕をくりかえしている。やがて700年をすぎると停廃記事が現われるようになり、当初の目的は失われた。

神籠石系山城は記録にみえない山城を一括した名称であるが、これまでの調査成果ではほぼ7世紀代に集約されてきている。朝鮮式山城と並行するものもある。「斉明紀」4年是歳条の「繕修城柵」記事が「庚申年」(660年)にあたるとしても、天智紀山城以前の城柵となれば、神籠石系山城のうちで7世紀前半代の須恵器が発見されるものなどが該当する公算は大きい。遺跡個々について今後の調査結果による判断が必要であろう。これまでの一遺跡の成果をもって神籠石系山城のすべてを判断する思考は危険である。また朝鮮式山城との共通点・相違点、朝鮮半島の古代山城との比較など、具体的に論じられるような段階に入ってきており、両国研究者たちによる共同討議の方向も模索されている。

近年わが国では、古代山城の保存・整備をめざして発掘調査がすすめられていて、新知見が次々に加えられつつある。外周の構造(土・石塁、門跡)、城内の施設(建物・貯水池)や、遺物(屋瓦・土器・木器・木簡)などの研究もすすめられ、山城相互の研究によっては地域的な特色の認定、政治史・社会史的な歴史背景にまで及ぶ研究の方向性も示されてきている。

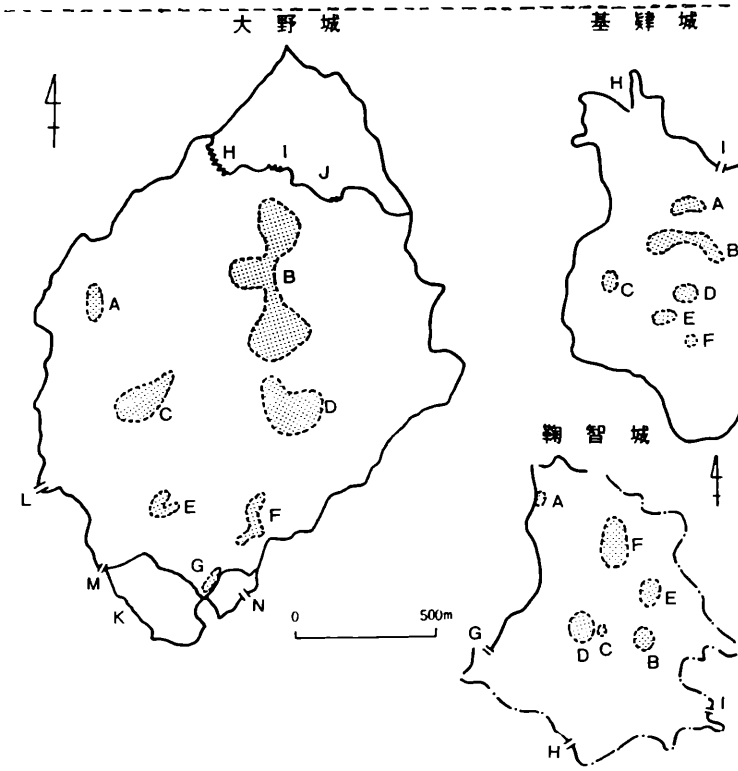
幸い私は1950年代から故鏡山猛先生に師事して西日本古代山城の調査にかかわるようになり、現在古代山城の調査や整備にたずさわっている。これまでの成果を通じて現在までの到達点や今後の課題についてふれてみたい。

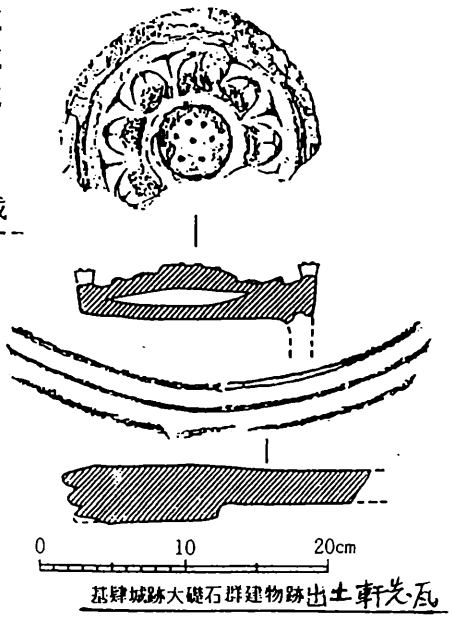
西日本古代山城の分布



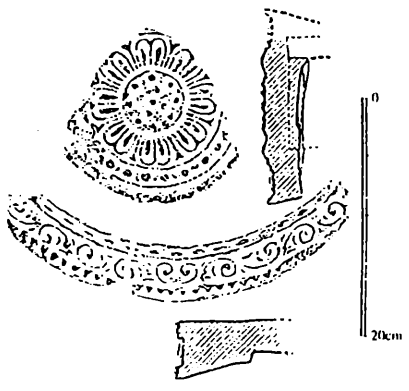
①大廻小廻山城
②鬼ノ城
③城山城
④永納山城
⑤石城山城
⑥御所ヶ谷山城
⑦鹿毛馬山城
⑧雷山城
⑨杷木山城
⑩高良山城
⑪女山城
⑫帯隈山城
⑬おつぼ山城
⑭城ノ山城
⑮宮地岳山城
⑯唐原山城

A高安城
B屋島城
C長門城
D大野城
E基肄城
F金田城
G茨城
H常城
I鞠智城





基肄城跡大礎石群建物跡出土軒先瓦

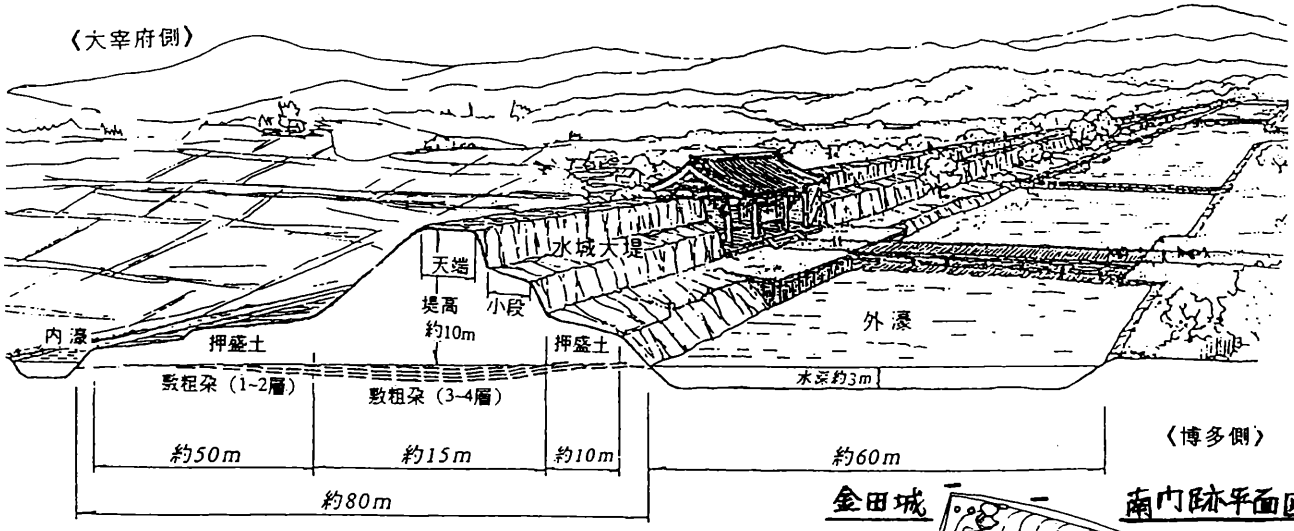


大宰府 水城西門付近出土鴻臚館系軒先瓦

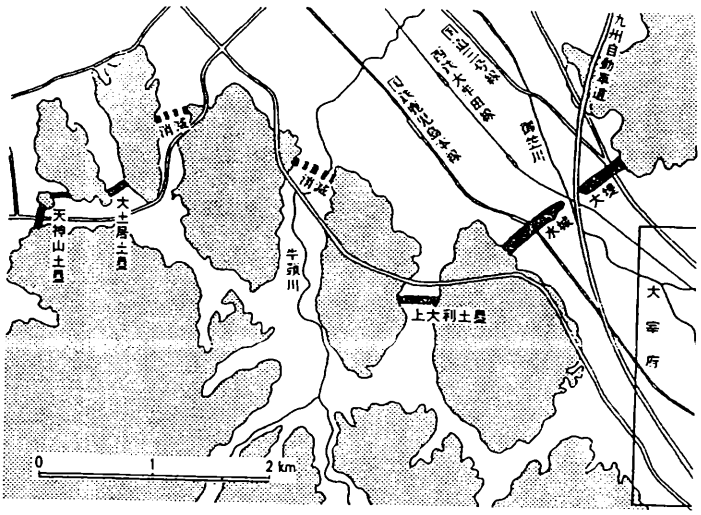
大野城
A御殿場礎石群 2棟 H石 間 石 垣
B主城原礎石群 19棟 I北 石 垣
C八ツ波礎石群 14棟 J小 石 垣
D村上礎石群 10棟 K大 石 垣
E猫坂礎石群 5棟 L水城口門礎
F尾花礎石群 10棟 M坂本口門礎
G増長天礎石群 4棟 N大宰府口門礎

基肄城
A～G建物
（A4棟 B13棟 C1棟 D4棟
E3棟 F1棟 G4棟）
H北帝門跡
I東北門跡
J南谷水門跡
K仏谷水門跡

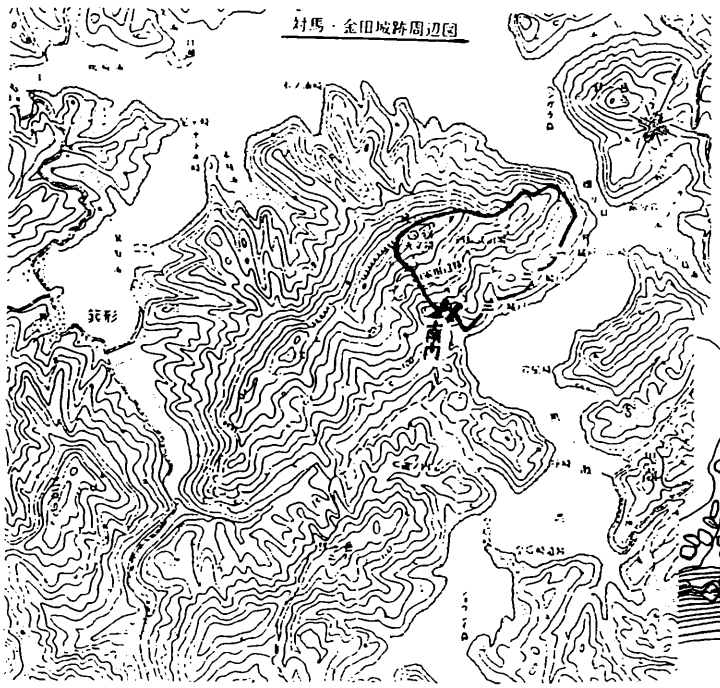
鞠智城
A佐官どん礎石 H堀切門跡
B長者原礎石群 I深迫門跡
C宮野礎石
D長者山礎石群
E上原礎石群
F米原礎石群
G池ノ尾門跡



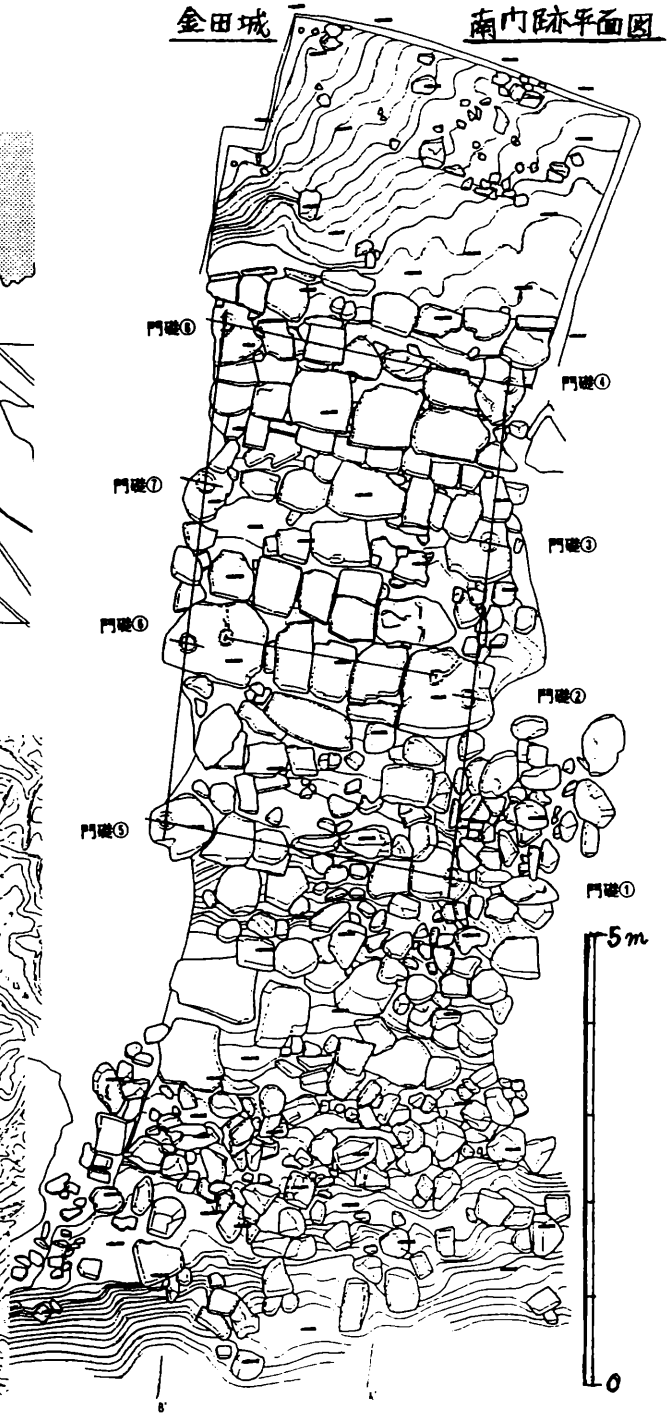
史跡：水城の横断面形状

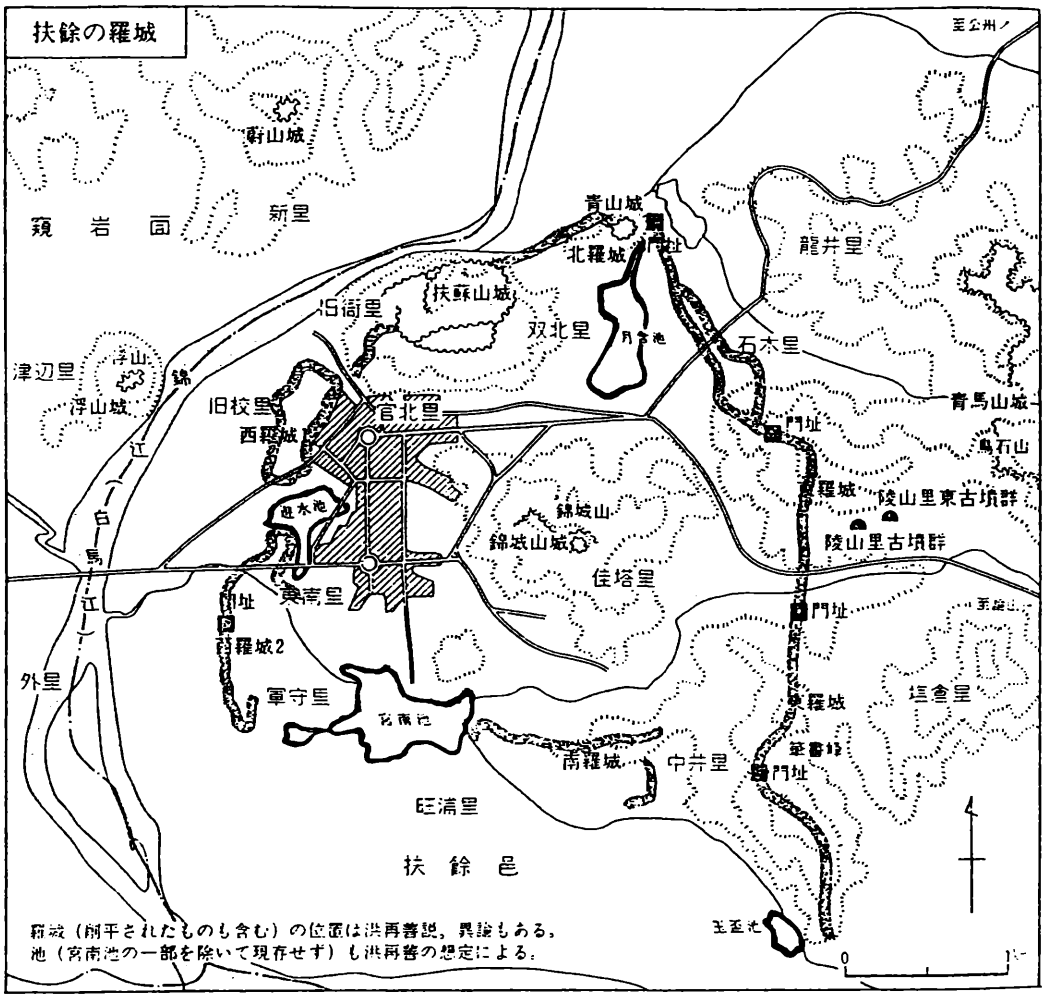


水城と小水城



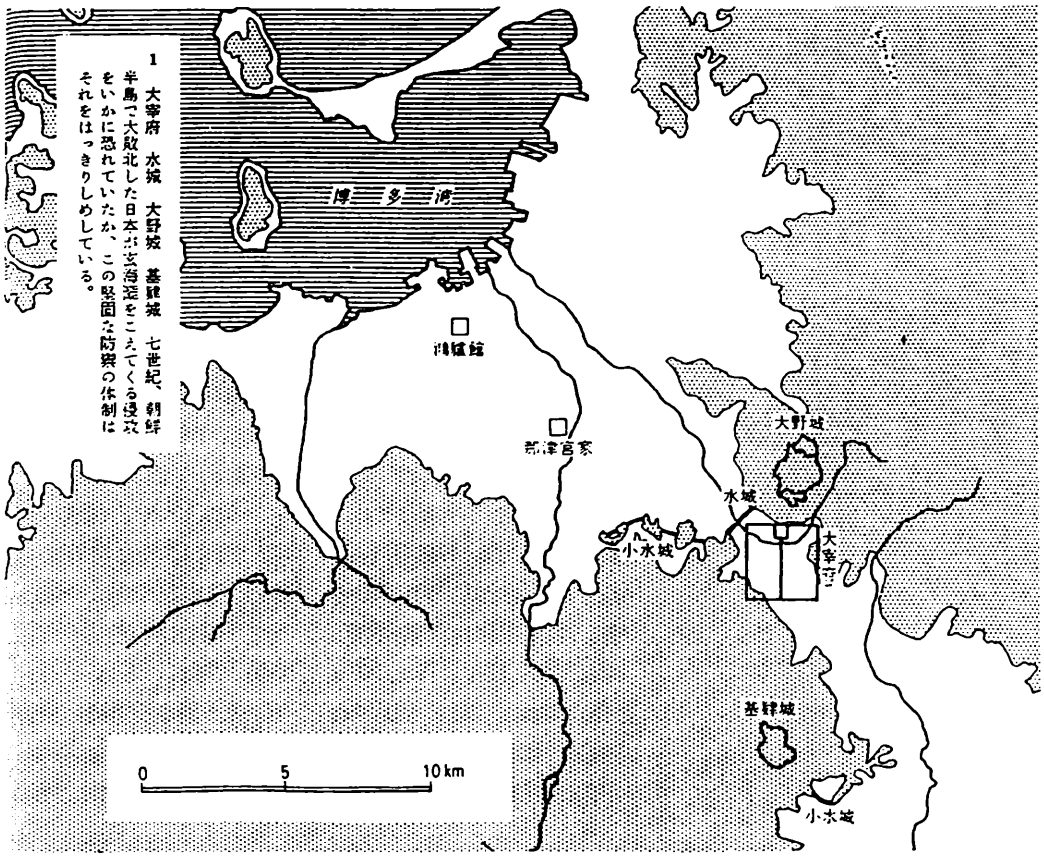
金田城　南門跡平面図





百済国泗沘の都城の羅城

（東潮・田中俊明「韓国の古代遺跡」による）



大宰府全体像把握の現況

（石松好雄「大宰府と多賀城」挿図による）

シンポジウムの司会にあたって

はじめに

赤司 善彦

九州国立博物館展示課長

Profile

あかし よしひこ
1957年生まれ
明治大学卒業。
福岡県教育庁文化課、九州歴史資料館などを経て
2005年から現職。
2003「筑紫の古代山城」『東アジアの古代文化』
2005「古代の山城とその背景」『日本海域歴史大系1』など

昭和61(1986)年度に福岡県教育委員会と大韓民国・国立文化財研究所との間で、文化財専門職員の相互派遣が始まり、今年度で20年という大きな節目を迎えました。この交流事業は、今回講演いただく金正基初代国立文化財研究所長と、藤井功初代教育庁文化課長(故人)の親交の中から発案されたものです。当時は行政が海外の機関と職員を派遣して相互に研修する機会はまだ例がありませんでした。現在では姉妹都市交流などによる文化財専門職員の相互派遣もそれほど珍しいことではなくなってきていますが、その嚆矢といえるかもしれません。

さて職員の派遣は最長3ヶ月の間で行われてきました。この事業での成果は実地を踏まえることで、新しい知見を各自の研究や業務に活かせたことにあります。近年では考古担当者の場合、発掘調査への参加もスケジュールに加えるようになっています。実際の現場を視察するだけでなく、現場の息吹を体験することができます。遺構の時期決定における土器編年についての考え方や土層の捉え方など、調査の方法についての日韓の相違を肌で感じることができるようになりました。これは発掘調査報告書を読むだけでは伺うことのできない貴重な体験となっています。

さらには、多くの知己が得られたことは何より得難いことです。これこそお二人の念頭にあった交流の真の意義ではないかと拝察します。この深い結びつきのおかげで、九州国立博物館の韓国内資料の借用に際しても、温かい協力と援助を頂くことができました。

このたび20年の節目を迎え、今後のさらなる人物交流・研究交流の発展を祈念し、記念講演とシンポジウムを企画した次第です。

記念講演とシンポジウム

今回は古代山城をテーマに講演とシンポジウムを開催します。記念講演では、まず冒頭に御紹介しました金正基先生にお越し頂きました。また、小田富士雄先生は、古代山城の第一人者であるだけでなく、福岡県文化財保護審議会の会長として、文化財の保存と活用に対して指導的立場におられます。お二人には古代山城を中心に、これまで遺跡の発掘調査がどのようにおこなわれてきたのか、これからの課題も交えてお話しをしていただきます。

「古代山城を掘る」と題したシンポジウムでは、最新の調査事例を基に、古代山城の研究を整理していただこうと考えています。四人の先生方のお話しをうかがいながら、日本と韓国の古代山城の比較を中心に、研究の現状を紹介したいと思います。

さて、山城というのは、外敵の侵入を防ぐとともに、これを迎え撃つために山の頂上や尾根などの自然地形を利用して築造された軍事施設です。日本では戦国時代に大名や領主が覇権を争って全国各地に山城を築いていますが、これより以前にも山城が築かれた時代があります。日本史に本格的な城が登場するのは天智三年(664)の水城、

その翌年の大野城・基肄城です。朝鮮半島の危機を背景にこの太宰府地域や瀬戸内、畿内に集中して築城されているのが特徴です。

『日本書紀』によれば、その築城に百済の亡命高官が関わったとあることなどから、これら諸城は一般に朝鮮式山城と呼ばれています。一方この朝鮮式山城が築かれた西日本の各地には、文献に記載のない無名の山城も知られているのです。近年も新しく発見が相次ぎ現在までに16城が確認されています。かつて明治時代には山の神域を囲む護石をなすものとして「神籠石（こうごいし）」と紹介されたことがあります。後に山城であることが証明されました。今日これらを神籠石式（系）山城と呼んで、学史的に朝鮮式山城と区別することが一般的です。築城時期が確定されてはいませんが、朝鮮式山城と時期を大きく隔てた築城ではないというのが大方の見方です。両者は規模や構造に微細な違いはあるものの、城壁に土と石を用いるなどの築城プランにも大きな差は認められません。最近では両者を総称して古代山城と位置づけています。

歴史的に山城は、紀元前１世紀頃に高句麗で築かれたことに始まり、その後、百済や新羅などでも順次築城されました。日本の古代山城もその系譜に位置づけられています。どこが同じで、どこからがオリジナルなのか。国内の歴史的事情が違うため、城を築いた人や目的も異なります。しかしながらこれまで土塁の列石など、日本独自の技術と考えられていたものが、実は百済の山城にもあった技術だということも分かっています。また、幾度となく実戦で鍛えられてきた歴史を持つ、朝鮮半島の古代山城に照らし合わせることで、日本の古代山城の戦略的な位置づけを考えるヒントになるのです。

このように日本の古代山城の解明には、朝鮮半島の古代山城の構造や変遷を参考にすることが欠かせません。近年は、日韓の調査研究が大いに進展し、共通の土俵で論議をする機会が増えてきました。

実は今回、古代山城をテーマとしましたが、この交流事業の中でも多くの人が研究テーマとして選んでいます。もちろん他のテーマの場合でも、古代山城の視察がスケジュールに入ることが多いのが事実です。それは多くの遺跡がすでに消滅するか、土中に埋没しているのに対して、土塁や石塁などの山城遺構は消滅することなく残存しているため、観察が可能なことが大きな理由の一つです。

韓国では金正基先生が記されているように、オリンピックの工事に伴う夢村土城の発掘が開始されたと同時に、史跡整備が注目されるようになり山城への関心が高まったのです。福岡県でも、昭和43年に始まった大宰府史跡の調査研究では、水城跡や大野城跡の解明も、大きな課題となっています。特にこの20年間、発掘調査は進展しました。また、一昨年の集中豪雨により大野城の城門や土塁は未曾有の被害を受けました。現在、精力的な復旧作業が行われており、これに伴う発掘調査でも多くの新しい発見がありました。このように、古代山城は両国にとっても重要で魅力的なテーマとなっていますし、今後の共同研究にもふさわしいテーマと考えているところです。

シンポジウム 報告①

扶余と扶蘇山城

金　容民

大韓民国国立文化財研究所遺跡調査研究室長

Profile

キム ヨンミン 김 용민
1965年生まれ
国立中央博物館考古部から国立扶余文化財研究所、文化財庁埋蔵文化財課、
国立扶余文化財研究所を経て、現在、国立文化財研究所遺跡調査研究室長
「扶蘇山城の城壁築造技法とその變遷に関する研究」
「百濟泗沘期土器に関する考察」
「益山王宮城の造營と空間区割に関する考察」　など

扶余は百済泗沘邑期(538年～660年)の中心舞台になった所である。その関連遺跡として、扶蘇山城と羅城として成り立った泗沘都城、そして郡守里寺址、定林寺址、王興寺址、陵山里寺址などの寺刹遺跡、そして陵山王陵以外に宮南池遺跡など多くの例を挙げることができる。

文献記録と発掘調査資料を通してみるとき、泗沘都城は百済が泗沘に遷都した時期である6世紀前半から中半頃に造成され、百済が滅亡した7世紀後半頃まで主に使用されていたと推定されている。都城内部の北側に扶蘇山城があり、その西側に円弧をなして曲がっていく錦江を自然境界と見なし、その東側に長い羅城を築く構造として自然地勢を活用した防御的な性格をよく見せてくれている。

扶蘇山城は版築技法を活用して築いた山城として、扶蘇山(192m)の頂上部周囲と低い渓谷におよぶ城壁を巡らした土築城である。版築技法は古代中国から影響を受けたとされ、百済初期王城として最近注目されているソウルの風納土城からもはっきりと確認されており、日本の太宰府にある大野城と水城でも見られる土城築造技法である。その方法は粘質土と真砂土を交互に反復させ、水平に突き固めて重ね上げながら層を成した高い城壁を築き、その内部には一定の間隔で木柱と横木を使用し、骨格を作りながら築き上げる痕跡が確認されている。扶蘇山城では門跡、建物跡など多くの施設が発掘の結果確認された。特に、城壁は百済、統一新羅、挑戦初頭期など3時期におよび築造ならびに補修されたことが確認され、調査の結果、百済時代には盛土を突き固める方法で城壁を構築したことが確認された。

扶蘇山城南便宜北里一帯は王宮跡と推定された所として、今までの発掘調査で建物跡、池、道路、地下貯蔵庫、工房跡など多くの遺構が確認されており、2005年度には規模の大きな大型建物跡が確認され、この一帯が王宮跡または王宮隣接跡としての可能性が高くなっている。

このように今までの発掘結果を見るとき、扶蘇山城を含んだ扶余(泗沘都城)は百済が最後の首都として活用するために造成した計画的な都市であり、扶余市内所々から自然低湿地を平地に造成した当時の痕跡が確認されている。

(翻訳:水ノ江 和同)

扶餘와 扶蘇山城

扶餘는 百濟 泗沘都邑期(538 年-660 年)의 中心 舞臺가 되었던 곳이다. 그 關聯 遺蹟으로서 扶蘇山城과 羅城으로 이루어진 泗沘都城, 그리고 都守里寺址, 定林寺址, 王興寺址, 陵山里寺址 등의 寺刹遺蹟, 그리고 陵山里 王陵, 以外에 宮南池遺蹟 등 많은 例를 들 수 있다.

文獻記錄과 發掘調査 資料를 通해 볼 때 泗沘都城은 百濟가 泗沘에 遷都한 時期인 6 世紀 前半에서 中半頃에 造成되어 百濟가 滅亡한 7 世紀 後半頃까지 주로 使用되었을 것으로 推定하고 있다. 都城 內部의 북쪽에 扶蘇山城이 있고, 그 서쪽으로 圓弧를 이루며 돌아가는 錦江을 自然 境界로 삼았으며 그 동쪽에 길게 羅城을 쌓은 構造로서 自然地勢를 活用한 防禦的인 性格을 잘 보여 주고 있다.

扶蘇山城은 版築技法을 활용하여 쌓은 山城으로서 扶蘇山(192m)의 頂上部 周圍와 낮은 계곡에 걸쳐 城壁을 돌린 土築城이다. 版築技法은 古代 中國에서 影響을 받았던 것으로서 百濟 初期 王城으로 最近 注目되고 있는 서울의 風納土城에서도 잘 確認되고 있으며 日本의 大宰府에 있는 大野城과 水城에서도 보여지는 土城 築造 技術이다. 그 方法은 粘質土와 磨砂土를 反復하여 水平으로 다져 올리면서 層을 이루어 높은 城壁을 쌓는 것으로서, 그 內部에는 一定한 間隔으로 木柱와 橫木을 사용하여 骨格을 만들면서 쌓아 올린 痕迹이 確認되고 있다. 扶蘇山城에서는 門址, 建物址 등 많은 施設이 發掘 結果 確認되었다. 특히 城壁은 百濟, 統一新羅, 朝鮮初 等 세 時期에 걸쳐 築造 및 補修되었음이 確認되었으며 調査 結果 百濟時代에는 純粹版築, 統一新羅 때는 版築과 基底部 石築 混用, 그리고 朝鮮初에는 盛土다짐 方法으로 城壁을 構築하였음이 確認되었다.

扶蘇山城 南便 官北里 一帶는 王宮址로 推定되는 곳으로서 지금까지의 發掘調査에서 建物址, 연못, 道路, 地下貯藏庫, 工房址 등 많은 遺構가 確認되고 있으며 2005 년도에는 規模가 큰 大形 建物址가 確認되어 이 一帶가 王宮址 또는 王宮 隣接址로서의 可能性이 높아지고 있다.

이러한 지금까지의 發掘 結果로 볼 때 扶蘇山城을 包含한 扶餘(泗沘都城)는 百濟가 마지막 首都로 活用하기 위해 造成한 計劃된 都市이며 扶餘 市內 곳곳에서 自然 低濕地를 平地로 建設한 當時의 痕迹들이 確認되고 있다.

シンポジウム 報告②

日本の古代山城 —北部九州を中心に—

向井 一雄

古代山城研究会代表

Profile

むかい かずお

1962年 愛媛県生まれ。

関西大学経済学部経済学科卒業。

コニカミノルタIJ(株)勤務。

1991年から古代山城研究会を組織し、現在、古代山城研究会・代表。

1991「西日本の古代山城遺跡－類型化と編年についての試論－」『古代学研究』第125号

2004「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』 など

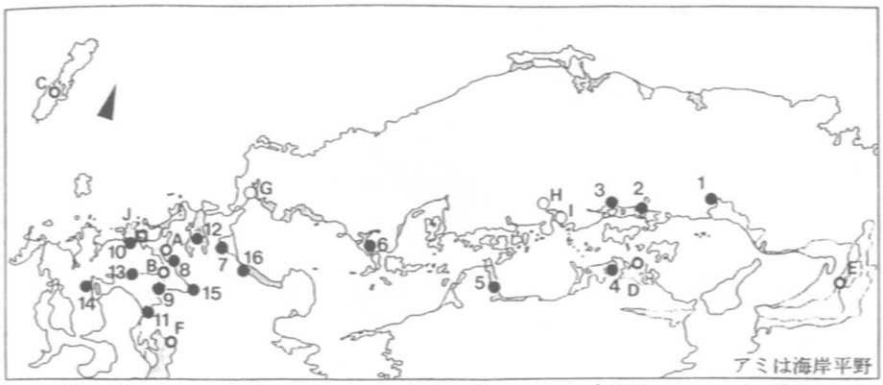
西日本の古代山城は、1990年代以降、史跡整備のため各地で発掘調査が行われるようになり、現在でも北部九州で7ヶ所、瀬戸内海沿岸の中四国地域で3ヶ所が調査・整備中である。韓国や中国東北地方の城郭についてもさかんに調査が行われはじめ、その実態が知られるようになってきた。1999年には、九州で新たに、宮地岳山城(福岡県筑紫野市)、唐原山城(福岡県築上郡上毛町)という二つの山城遺跡が発見され、古代山城研究はいままさに新たな段階に入ってきているといえる。

『日本書紀』『続日本紀』などに築城・修築記事のみえる山城(いわゆる朝鮮式山城)は12城を数え、663年の白村江の戦いの後、唐の侵攻から防衛するために築かれたといわれている。しかし、文献に記録のない山城(神籠石系山城)については、いつ頃、誰が、どのような目的で造ったのか定かでなく、邪馬台国や筑紫君磐井などいろいろな説が唱えられている。戦前の「神籠石論争」以来、神籠石系山城の年代をめぐって長く論争が続けられてきたが、最近の発掘調査や研究の進展によって、ようやく７世紀代に造られたことが明らかになってきた。ただし７世紀代といっても、その築城を665年に造られた大野城以前とするか以後にするかによって、「先行説」と「後出説」にわけられ、論争に決着はついていない。

最近では、660年頃、百済救援軍を率いた斉明天皇が築城したとする説が通説化し、神籠石の謎が解明されたかのような印象を与えているが、いまだ問題は多い。「斉明朝築城説」によって、6世紀末～7世紀初頭だった先行説の年代は660年頃まで引き下げられ、多くの神籠石系山城は白村江の戦いの後、工事が未完成に終わり、放棄されたが、その一部は修築されて新規に築かれた朝鮮式山城と併存したとされる。しかし、立地する地形や形態の異なる山城が同時期、同目的のために造られたとは考えにくい。先行説はすべての城を対外防衛用に造られたとし、山城の形態差を地域差とみているが、7世紀後半～8世紀初頭に築城年代を位置づける後出説では時期差や機能差(対外防衛→律令制化・地域支配)として段階的に築造目的が変化していったと推定し、時代が下るにつれて対外防衛的な色彩が薄れ、地方支配の拠点となっていったのではないかと考えている。先行説は山城の分布と対外関係史料にもとづき、後出説は城壁の形態や巡らせ方、石垣の積み方や城門の形態など城郭構造の比較検討に重点を置いており、両者は共通の土俵で議論しているとは言い難い。

「モノ(遺物・遺構)をして語らせる」のは考古学の本領だが、古代山城という遺跡を読み解くために考古学を基本的な研究方法とするなら、遺跡・遺構に立脚した論議でなければならない。その際、日本の古代山城のルーツは中国・朝鮮半島に求められるため、大陸の城郭と比較することは今後ますます重要になってくると思われる。また、古代山城は大規模で類例も少ない遺跡であるため、建築史や城郭史、歴史地理学、文献史学など様々な研究分野からも多角的に検討を行っていく必要がある。

今回の報告では、現段階での研究の到達点や残された課題についてお話しし、"謎の神籠石"の実像に迫りたいと考えている。



1 播磨城山城　2 大廻小廻山城　3 鬼城山城　4 讃岐城山城　5 永納山城　6 石城山城
7 御所ヶ谷城　8 宮地岳城　9 高良山城　10 雷山城　11 女山城　12 鹿毛馬城
13 帯隈山城　14 おつぼ山城　15 杷木城　16 唐原城
A 大野城　B 基肄城　C 金田城　D 屋嶋城　E 高安城　F 鞠智城
G 長門国の城　H 常城　I 茨城　J 怡土城

図 1　古代山城分布図

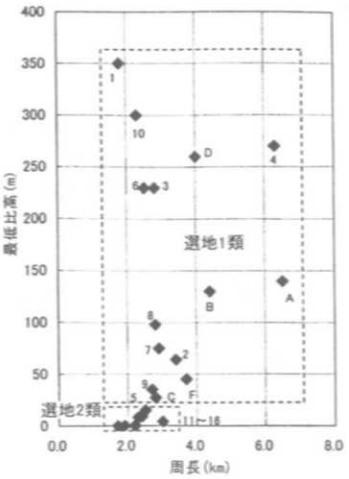


図 2　古代山城の周長比高相関図

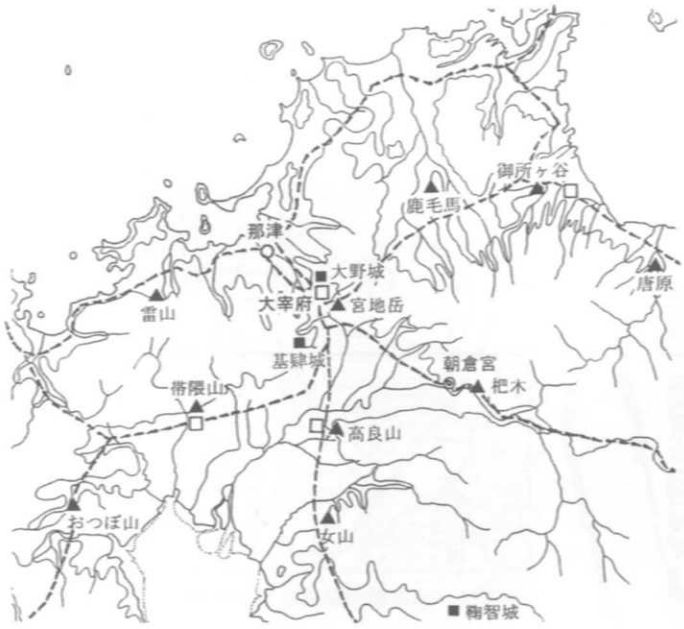


図 3　北部九州の古代山城分布図

点線は官道（駅路）

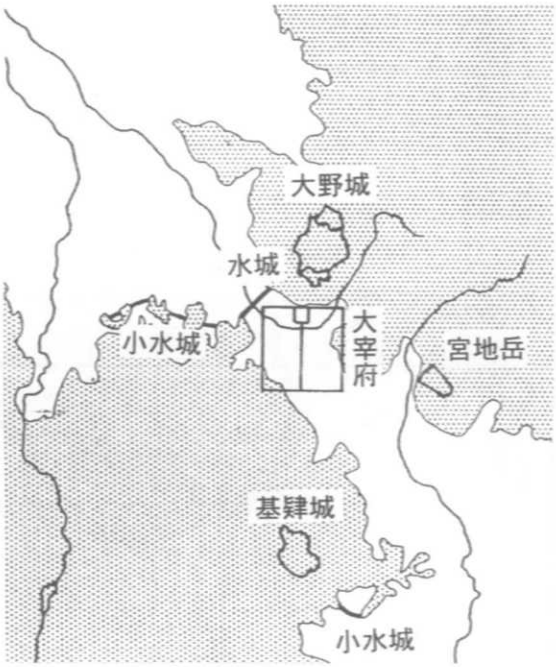


図 4　大宰府周辺の古代山城

	山城名	所在地	周長(km)	標高(m)	最低比高(m)	外郭線構造					列石・石材						城門		類型
						土築・石築	盛形態	折・曲	版築	水門	列石	石材加工	石材供給	被覆・露出	置き方	段差調整面	列石前柱(有無・間隔m)	城門	門礎	
1	播磨城山	兵庫県たつの市	1.8	458	350	石?	内托	折?		石盛		野面	現地					○?	凹型	選地1外郭1-b
2	大廻小廻	岡山県岡山市・瀬戸町	3.4	198	64	土	内托	折	◎	石盛	◎	割石	現地	被覆	寝	×	×	○?		選地1外郭1-b
3	鬼城山	岡山県総社市	2.8	403	230	土・石	突築	折	◎	石盛	◎	割石	現地	露出?	寝	×	◎3.0	◎	凹○型	選地1外郭1-a
4	讃岐城山	香川県坂出市・丸亀市	6.3	462	270	石・土	内托	折		石盛	○	野面	現地	被覆	寝	×		◎	凹型	選地1外郭1-b
5	永納山	愛媛県西条市	2.5	128	15	土	内托	折	◎		◎	割石	現地	被覆	寝	×	○3.0			選地1外郭1-b
6	石城山	山口県光市・田布施町	2.5	350	230	土	内托	折	◎	石盛	◎	割石	現地	被覆	横	○	◎2.19	◎	凹型	選地1外郭1-c
7	御所ヶ谷	福岡県行橋市・勝山町・犀川町	2.9	247	75	土	突築	折?	◎	石盛	◎	切石	現地	被覆	横	◎	◎1.8	◎		選地1外郭1-a
8	宮地岳	福岡県筑紫野市	2.8	339	98	土	内托	折	○?	石盛	◎	切石	現地	露出?	横	×		○?		選地1外郭1-c
9	高良山	福岡県久留米市	2.7	252	35	土	内托	曲	○?	石盛?	◎	切石	現地?	露出	横	×				選地1外郭2
10	雷山	福岡県前原市	2.3	483	300	土盛なし	(内托)	折		石盛	◎	切石	搬入	露出	横	◎	×			選地1外郭2
11	女山	福岡県瀬高町	3.0	202	4	土	内托	曲	◎	石盛	◎	切石	搬入	露出	横	◎	◎3.0			選地2外郭2
12	鹿毛馬	福岡県籾田町	2.2	70	0	土	内托	曲	◎	土盛	◎	切石	搬入	露出	横	◎	◎3.0	○?		選地2外郭2
13	帯隈山	佐賀県佐賀市	2.4	174	9	土	内托	曲	◎	土盛?	◎	切石	搬入	露出	横	◎	◎3.0	◎		選地2外郭2
14	おつぼ山	佐賀県武雄市	1.9	66	0	土	内托	曲	◎	低石盛	◎	切石	搬入	露出	横	◎	◎3.0	◎		選地2外郭2
15	杷木	福岡県杷木町	2.3	130	8	土盛なし	(内托)	曲	○?	土盛?	◎	切石	搬入	露出	横	◎	×			選地2外郭2
16	唐原	福岡県上毛町	1.7	73	0	土盛なし	(内托)	曲?		土盛	◎	切石	搬入	露出	横	◎	×	○?		選地2外郭2
A	大野城	福岡県太宰府市・宇美町	6.5	410	140	土・石	突築	折?	◎	石盛	○	野面	現地	被覆?	寝	×	◎1.6	◎	○型	選地1外郭1-a
B	基肄城	佐賀県基山町	4.4	416	130	土	突築		○?	石盛		野面	現地					◎	○型	選地1外郭1-a
C	金田城	長崎県対馬市	2.8	276	27	石	突築	折?		石盛	○?	野面	現地					◎	○型	選地1外郭1-a
D	屋嶋城	香川県高松市	4.0	292	260	石	内托	折?				野面	現地					◎		選地1外郭1-b
E	高安城	大阪府八尾市・奈良県平群町		488		土?	内托?													選地1外郭1-b
F	鞠智城	熊本県山鹿市・菊池市	3.7	169	45	土	突築?		○?		○	野面	現地	被覆?	寝	×	◎1.8	◎	○型	選地1外郭1-b

表 1　古代山城構造比較一覧

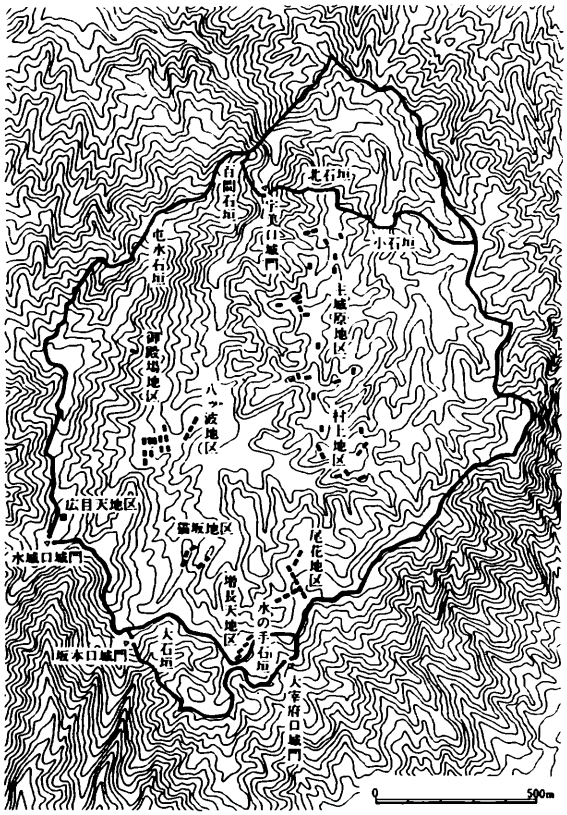


図 5　福岡県大野城遺構平面図

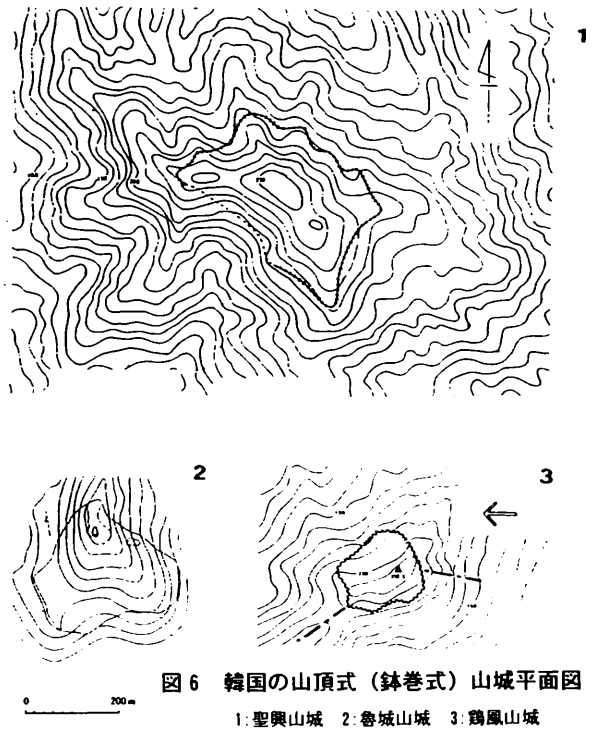


図 6　韓国の山頂式（鉢巻式）山城平面図

1：聖興山城　2：魯城山城　3：鶏風山城

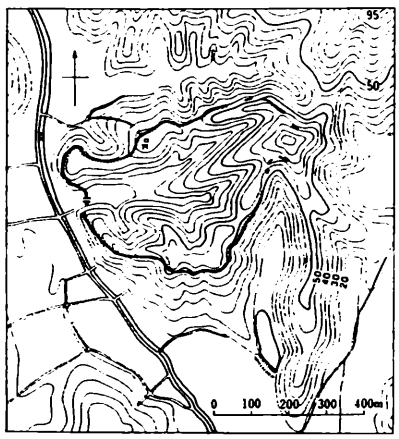


図 8　福岡県鹿毛馬遺構平面図

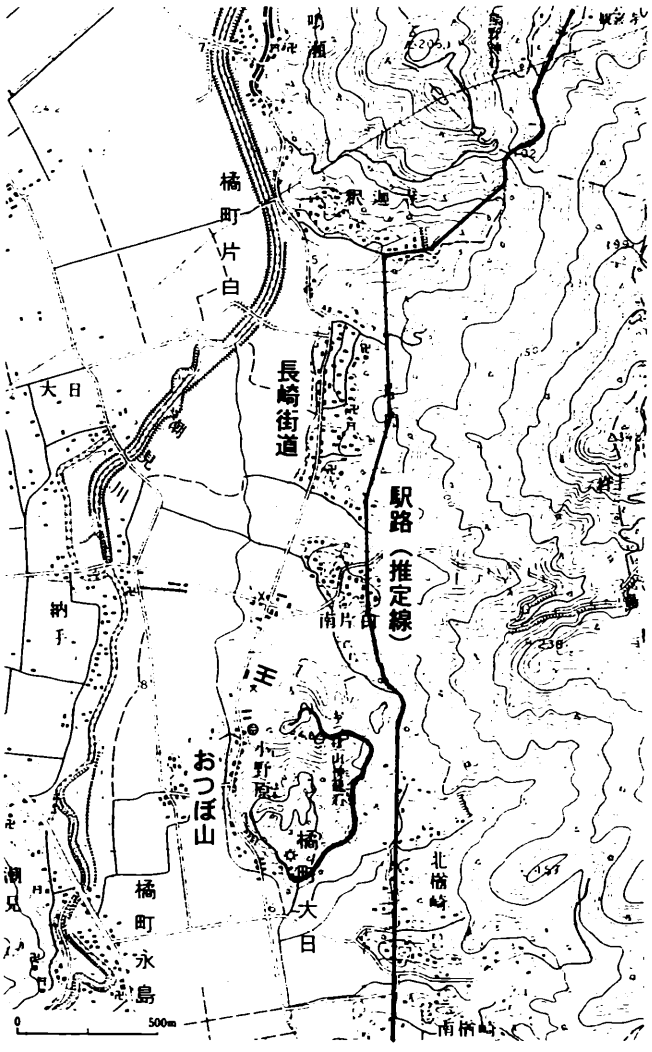


図 7　佐賀県おつぼ山周辺の官道（駅路）

太線は土塁の造られている部分

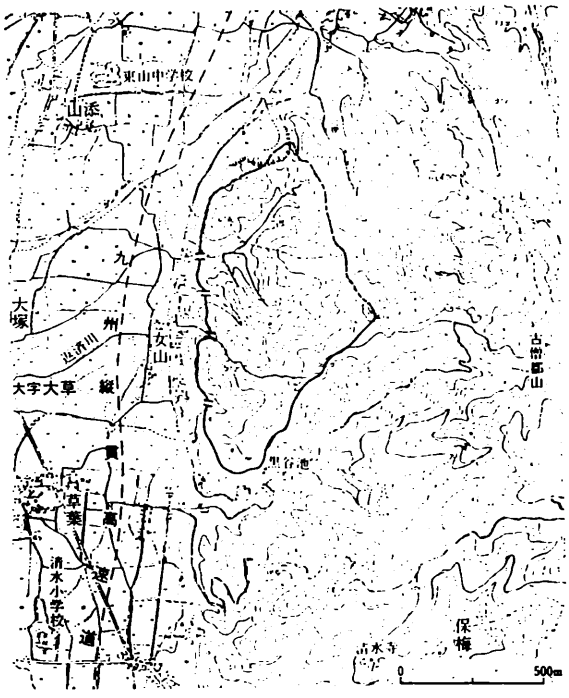
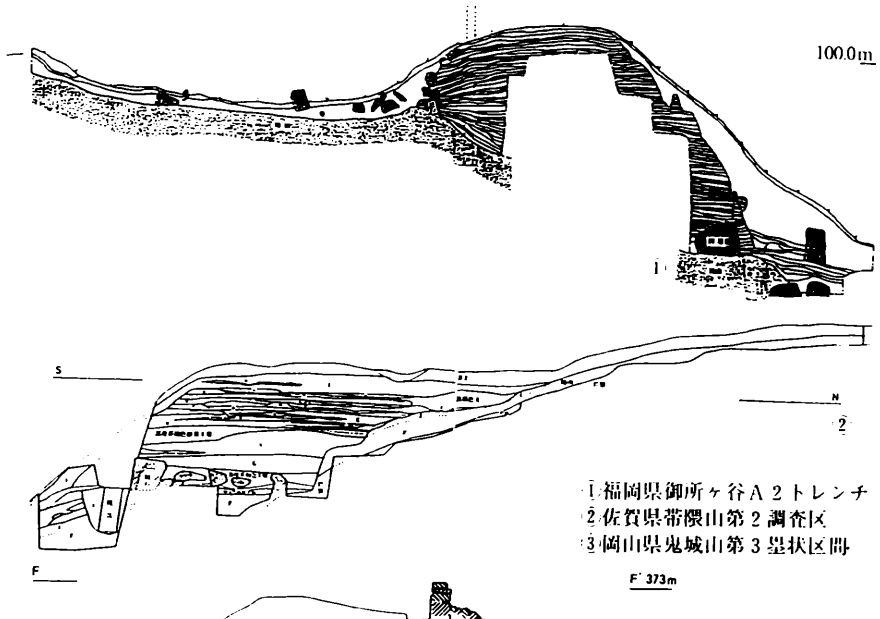
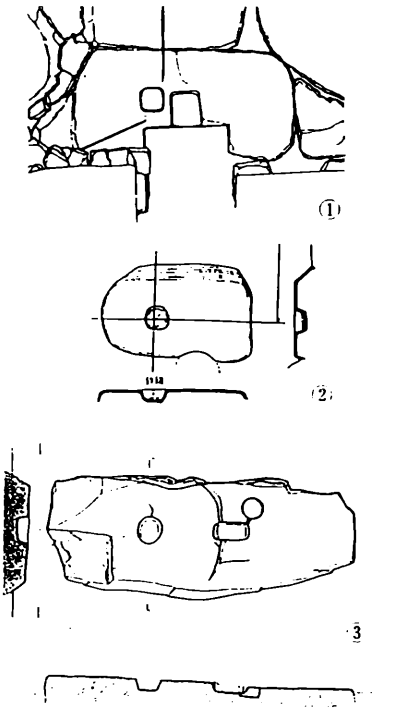


図 9　福岡県女山遺構平面図



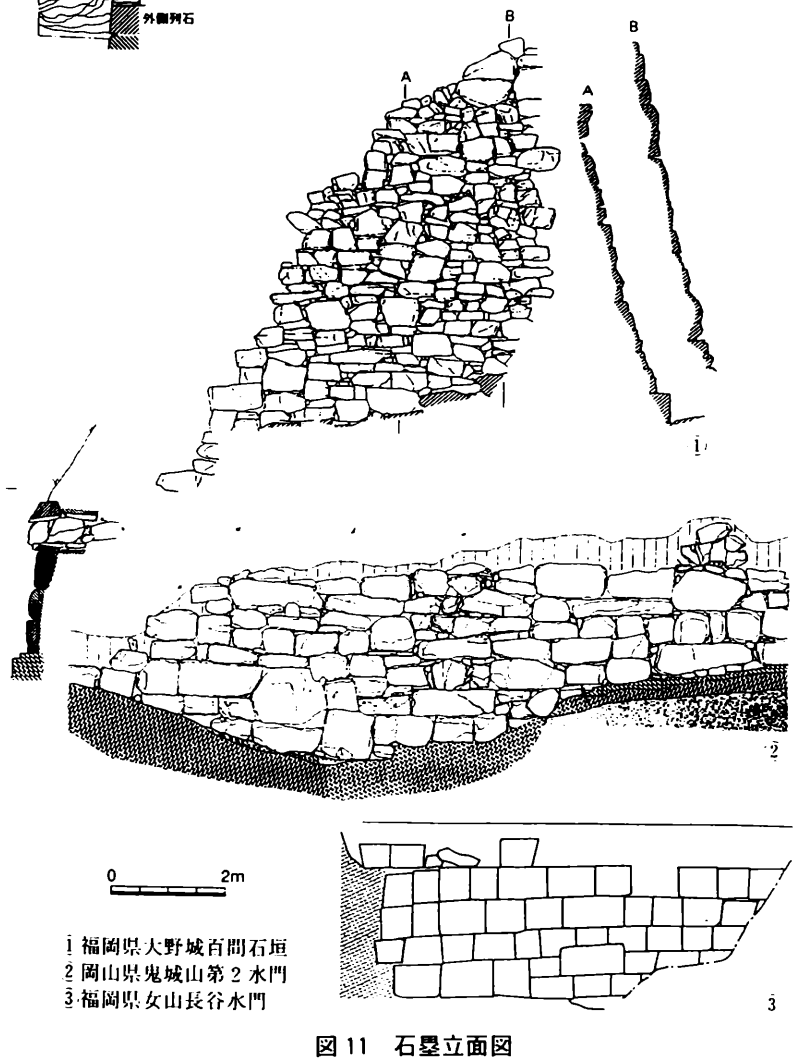
1 福岡県御所ヶ谷A2トレンチ
2 佐賀県帯隈山第2調査区
3 岡山県鬼城山第3墨状区画

図10　土塁断面図



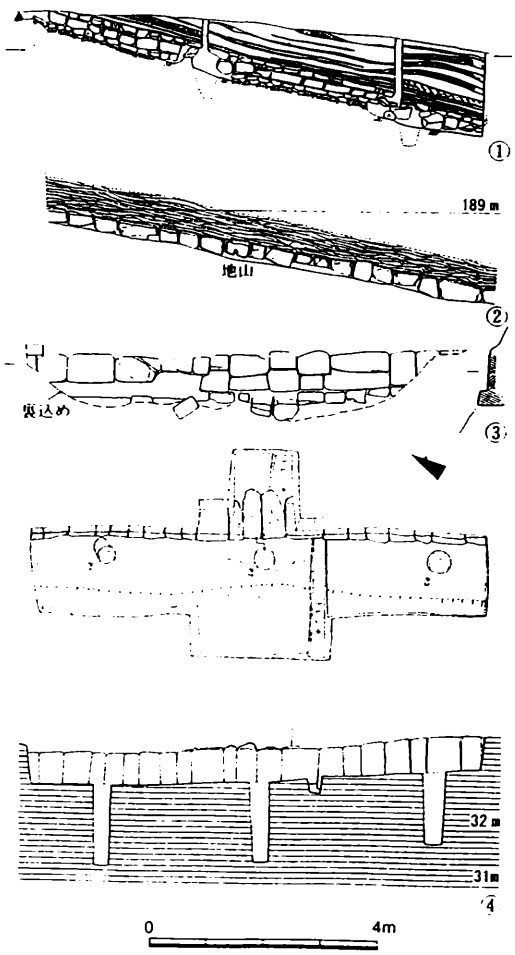
①岡山県鬼城山西門
②佐賀県基肄城東北門
③福岡県水城東門

図12　門礎石（唐居敷）実測図



1 福岡県大野城百間石垣
2 岡山県鬼城山第2水門
3 福岡県女山長谷水門

図11　石塁立面図



1 韓国蛇山城東門址北壁
2 岡山県大廻小廻山B地点
3 福岡県宮地岳A墨状遺構
4 福岡県鹿毛馬Aトレンチ

図13　列石立面図

シンポジウム 報告③

韓国の山城最新発掘調査成果について

朴　鍾益

大韓民国国立昌原文化財研究所学芸研究官

Profile

パク ジョンイク 박 종익
1961年生まれ
東義大學校 大學院 史學科 卒業(文學碩士)
1990年に国立昌原文化財研究所に勤務。
国立扶余文化財研究所、文化財庁埋蔵文化財課を経て、
現在、国立昌原文化財研究所学芸研究官
1994「古代山城の築造技法に対する研究」
『嶺南考古學』15, 嶺 南考古學會
2002「咸安城山山城出土木簡の性格検討」
『韓國考古學』48, 韓國考古學會　など

韓国の山城は我々がいつも簡単かつ頻繁に接することのできる関防(防御陣地)遺跡である。韓国は国土の大部分が山地で構成されているため、古代から山城が発達していて、その効用もよく知られている。

最近韓国では、多くの遺跡が発掘されているが、その中でも山城に関する調査比率が次第に増加しているのが実情である。2003年度発掘調査許可件数705件中47件、2005年972件中66件と、約6.7%を占めるほどである。

そこで、古代山城に関する発掘調査成果を高句麗、百済、新羅の順に、その内容を探ってみたい。

高句麗遺跡としては忠州付近の中原で高句麗碑が発見されたことがあり、清原南城谷高句麗遺跡、京畿道漣川の堂浦城、隠垈里城、瓠蘆古壘などがある。ソウルの峨嵯山堡壘群に関する発掘調査では紅蓮峰1、2堡壘、峨嵯山3堡壘などで、高句麗人の生活を知ることのできる各種遺物、遺構とともに、最近臼や杵が発見された。

百済遺跡としてはソウルの風納土城と論語木簡が確認された仁川の桂陽山城、木槨庫などが確認された利川雪城山城、大田月坪洞遺跡、錦山栢嶺山城、集水井が確認された順天剣丹山城、麗水敲楽山城、光陽馬老山城などがある。益山王宮里遺跡では大形石築排水路と化粧室、工房跡などが確認された。

新羅と関連し、新羅の辺境地域である慶南咸安城山山城では、新羅の特徴的な築造技法である基壇補築が確認され、特に貯水池内から6世紀中葉頃の銘文木簡約200余点(題箋軸7点を含む)が出土し、韓国内最大木簡出土地域としての重要性を示している。慶南昌寧の牧馬山城、慶北聞慶の姑母山城、大田の鶏足山城、忠北報恩の三年山城、安城の竹州山城などでも、基壇補築が確認されていて、新羅の統一政策と関連していることがわかる。そして、丹陽独楽山城、聞慶老故城、奉化清涼山城、忠州大林山城、報恩虎岾山城、堤川臥龍山城、漣川堂浦城、春川三岳山城などでは城壁面に垂直な柱痕跡がある。

また、山城遺跡ではほとんど大部分の貯水施設(集水井、蓮池など)が確認され、その内部から木簡など主要な遺物が出土していて、相当に期待が持たれる。昌寧の火旺山城蓮池内部では、鏃斗、獣骨(虎、猪など)が見られる。

一般的に百済と関係する円形の蓮池や、新羅と関連し方形の蓮池が確認されている。

一方、城壁の保護と城内部の排水のために水口(聞慶姑母山城など)が作られているが、その形態も時期によって少しずつ違った姿をみせている。

(翻訳:水ノ江 和同)

寫眞 1)　咸安 城山山城 南壁 基壇補築

寫眞 2)　咸安 城山山城 西壁 基壇補築

韓國의 山城 最新 發掘調査 成果에 대하여

韓國의 山城은 우리가 늘 쉽게 자주 대할 수 있는 關防遺蹟이다. 韓國은 國土의 大部分이 山地로 되어있기 때문에 古代로부터 山城이 發達하였고 그 效用도 잘 알려져 있다.

最近 韓國에서는 많은 遺蹟들이 發掘되고 있지만, 그 渦中에서도 山城에 대한 調査比率이 점차 增加하고 있는 實情이다. 2003年度 發掘調査 許可件數 705件 중 47件, 2005년 972건 중 66건으로 약 6.7%를 차지할 정도이다.

古代山城에 대한 發掘調査는 高句麗, 百濟, 新羅의 順으로 그 內容을 簡略하게 살펴보고자 한다.

高句麗유적으로는 忠州附近의 中原에서 高句麗碑가 發見된 적이 있고, 淸原 南城谷 高句麗遺蹟, 京畿道 漣川의 堂浦城, 隱垈里城, 瓠蘆古壘 등이 있다. 서울의 峨嵯山堡壘群에 대한 發掘調査에서 紅蓮峰 1, 2 堡壘, 峨嵯山 3 堡壘 등에서 高句麗人의 삶을 알 수 있는 各種 遺物, 遺構와 더불어 最近 방아(碓)가 발견된 적이 있다.

百濟유적으로는 서울의 風納土城과 論語 木簡이 확인된 仁川의 桂陽山城, 木槨庫 등이 확인된 利川 雪城山城, 大田 月坪洞遺蹟, 錦山 栢嶺山城, 集水井이 확인된 順天 劍丹山城, 麗水 敲樂山城, 光陽 馬老山城 등이 있다. 益山 王宮里遺蹟에서는 大形 石築 排水路와 化粧室, 工房址 등이 確認된 바 있다. 印章瓦가 出土된 곳으로는 扶餘地域 外 錦山의 栢嶺山城이 있다.

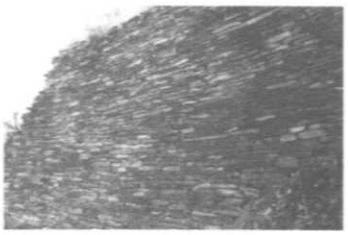
新羅와 관련하여 新羅의 邊境地域인 慶南 咸安 城山山城에서는 新羅의 特徵的 築造技法인 基壇補築이 確認된 바 있으며, 특히 貯水池內에서 6 世紀 中葉頃의 名文木簡 약 200 여 点(題籤軸 7 点 包含)이 出土되어 韓國내 最大木簡 出土地域으로 重要示되고 있다. 慶南 昌寧의 牧馬山城, 慶北 聞慶의 姑母山城, 大田의 鷄足山城, 忠北 報恩의 三年山城, 安城의 竹州山城 등에서도 基壇補築이 確認되고 있어 新羅의 統一政策과 關聯되어 있음을 알 수 있다. 그리고, 丹陽 獨樂山城, 聞慶 老故城, 奉化 淸凉山城, 忠州 大林山城, 報恩 虎岾山城, 堤川 臥龍山城, 漣川 堂浦城, 春川 三岳山城 等에서는 城壁面에 垂直의 기둥홈이 있다.

또한 山城遺蹟에서는 거의 大部分 貯水施設(集水井, 蓮池 等)이 確認되며, 그 內部에서 木簡 等 주요한 遺物들이 出土되고 있어 상당한 期待를 가지게 한다.

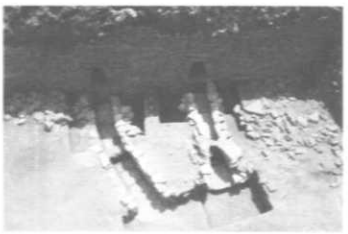
昌寧의 火旺山城 蓮池 내부에서는 雉斗, 獸骨(虎, 멧돼지 등)이 보인다. 일반적으로 百濟와 關聯하여 圓形의 蓮池가, 新羅와 關聯하여 方形의 蓮池가 確認되고 있다.

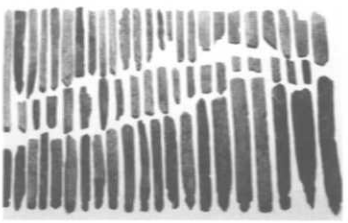
한편, 城壁의 保護와 城 內部의 排水를 위해 水口(聞慶 姑母山城 等)가 만들어져 있는데 그 形態도 時期에 따라 약간씩 다른 모습을 보이고 있다.

寫眞 3) 安城 竹州山城 基壇補築


寫眞 4) 寧越 王陵城 城壁 全景

寫眞 5) 忠州 大林山城 城壁


寫眞 6) 聞慶 姑母山城 水口


寫眞 7) 咸安 城山山城 出土 木簡

寫眞 8) 昌寧 火旺山城 蓮池

シンポジウム 報告④

日韓の古代山城 ―類似点と相違点―

亀田 修一

岡山理科大学 教授

Profile

かめだ しゅういち
1953年　福岡県生まれ
1980年九州大学大学院文学研究科修了
1977～1979年大韓民国忠南大学校留学
現在、岡山理科大学総合情報学部教授
1981「百済古瓦考」『百済研究』12　大韓民国忠南大学校百済研究所
2006『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館　など

朝鮮半島には約2000ヵ所の古代山城があるといわれています。日本の古代山城は、記録にはありますが場所がよくわからないものを含めて約30ヵ所です。それも西日本だけです。まずこの差は歴然としています。つまり古代の日本には戦争用の山城はほとんどなかったということがまずいえます。

一方、朝鮮半島の古代山城は単に戦争に関わるだけのものではないようです。つまり政治の場や象徴としての意味もあったものと考えられています。これは日本の江戸時代の城と似ていると思います。江戸時代の城も本来は戦争のためのものですが、次第に政治の中枢としての機能にウエイトをかけていき、天守閣はシンボルとして意識されたと考えられています。そして日本の古代山城も一部にはそのような意味があったと考えられています。筑前大野城などはその可能性があると思いますし、少なくとも吉備の鬼ノ城はそのように思われます。鬼ノ城は最近西門や角楼、土塁などの一部が復元されましたが、平野部からその姿をはっきり見ることができます。山城の機能として以前よく言われましたひっそりと逃げ込むための城であるという考えは少なくとも鬼ノ城には使えないようです。

朝鮮半島の山城の起源に関しましては、正確にはわかっていませんが、高句麗の尉那巖城というお城がA.D.3年に築かれたと『三国史記』に記されています。現在の中国・集安の山城子山城・丸都山城にあたると考えられていますが、『魏志』毌丘倹伝に244年に丸都を攻撃したが、険しい山城であったと書かれていますので、少なくとも3世紀ころには山城はあったものと考えられます。

日本の原始古代の城としては、関連するものとして弥生時代の高地性集落や環濠集落などが挙げられますが、古墳時代には基本的につながらず、古代山城とは直接的にはつながらないようです。このようなあり方は朝鮮半島と日本で大きな違いといえると思います。

日本の古代山城は『日本書紀』にも記されていますように、665年に築かれた大野城や基肄城などが確実な最古の山城のようです。これらの山城は百済の亡命貴族たちの指導によって築かれたもので、朝鮮半島の山城をモデルとして7世紀後半ころに作られ始めたことがわかります。ただ一方で神籠石(系山城)と呼ばれている、記録にその名前がないお城に関してはいろいろな意見が今でもあります。しかしこれも朝鮮半島系の山城であるということに関しては基本的に認められていると思います。

ただ、『播磨国風土記』神前郡多駝里(兵庫県福崎町？)条に記された「城牟礼山(きむれやま)」は応神天皇の時代に百済から渡ってきた人々が故郷のやり方で作った城であると書かれていますので、もしこれが確認されますと、最古の朝鮮半島系の山城(土城)となるかもしれません。

次に、山城の規模の話をします。百済地域の山城と日本の山城の大きさを比べますと、日本の山城はだいたい城周が2000mくらい以上のものですが、百済のものはほとんどが1000m以下です。そして城周1000m以上のものは百済ではだいたいその地域の拠点の城であったり、国家の中心

的なお城であったりします。ちなみに忠清南道聖興山城は城周約1500mですが、この城は百済が都を現在の公州においていた熊津時代の501年に築かれた地方拠点の加林城と考えられています。当時の王城の公山城は城周が約2650m、そのあとの扶蘇山城が約2200mです。このように日本に城作りを教えた百済の城の主なものはだいたい1000m以上の大きさということがわかります。そして日本の古代山城はそのクラスの大きさになっています。その数は朝鮮式山城と神籠石(系山城)を含めて筑前が5ヵ所と最も多いですが、次いで肥前が3ヵ所、筑後と豊前が2ヵ所、そして備後と讃岐も2ヵ所、あとは基本的に一つの国に1ヵ所ずつです。つまり朝鮮半島からの攻撃を意識した大宰府周辺をのぞけば、基本的に先ほどの百済の聖興山城と同じようにそれらの地域の拠点に築かれていると言うことができると思います。このようなあり方も日本の古代山城が朝鮮半島のあり方と類似している点ということができると思います。

ただ、日本の古代山城は全体に大きいように思います。それは当時の日本の国家が唐・新羅の攻撃を強く恐れていたのか、それとも単に大きなものを作りたかったのか。

ちなみに朝鮮半島の数百m以下クラスの地域に密着したお城が日本になかったのかというと基本的にはないのですが、先ほど述べた『播磨国風土記』の「城牟礼山」が百済系の山城(土城)であるならば、数百m以下クラスのものであるかもしれません。

最後に、石の使い方のお話をします。まず朝鮮半島では土城と石城に分けることができます。土城は基本は土で作りますが、基礎部分に石を使うこともよくあります。これは日本の神籠石(系山城)に通じると思っています。そして最近朝鮮式山城でも基礎部に石を並べるものが見つかっておりますので、基本的には同じということができると思います。

その使われる石ですが、朝鮮半島では自然石、割石、加工石、切石などいろいろあり、基本的に時代が新しくなるにつれてこの順に使われるようになってきます。ただ新しい時代でも自然石や割石なども当然使います。そしてこのような石の種類は日本でも同様です。皆さんよくご存じの九州の神籠石(系山城)は切石が基本で、瀬戸内海沿岸地域の神籠石(系山城)は基本的に切石ではなく、方形などに加工した石が使われています。地域的な特色が見られます。

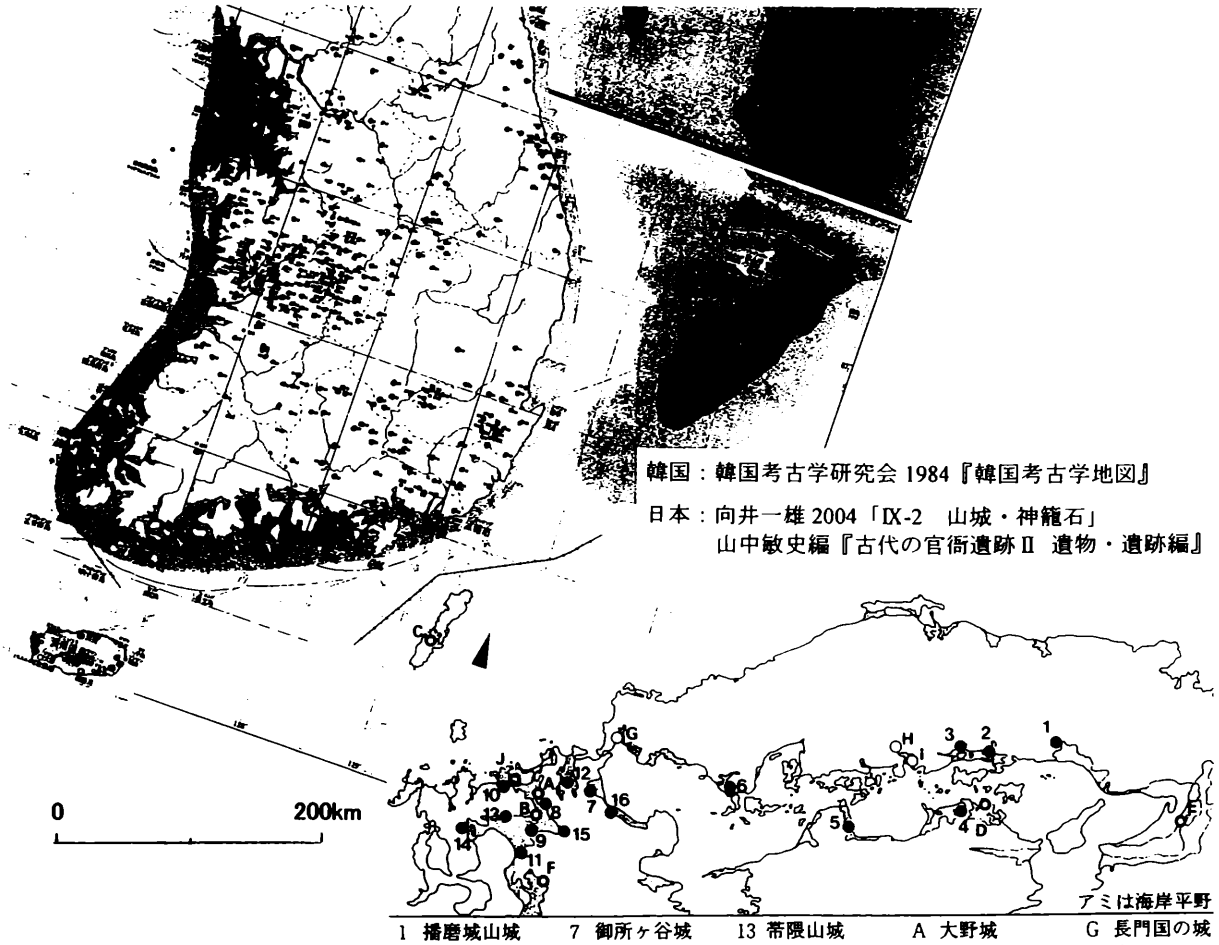
そして城壁を基本的にすべて石で築く石城は、まさに朝鮮半島の山城そのもののようなイメージですが、実際は思っているほど多くはなく、百済地域では土城と石城はだいたい同じくらいです。日本では対馬の金田城が石城で、讃岐屋嶋城は石垣の中は土と石を混ぜた土石混築の状態です。備中鬼ノ城は一見石城のように思われますが、基本は土城で、一部石垣がある程度です。つまり日本の古代山城には石城はほとんどないといえます。山城が築かれた山に土が多いのか、石が多いのかという自然の条件もあるかもしれませんが、百済では土城が発達していますので、その流れにのっているといえるのかもしれません。

以上、おおざっぱなお話をしてきました。朝鮮半島の古代山城と日本の古代山城を比較するときには、そのほか水門、内部施設などいろいろな比較項目があるのですが、これくらいにしておきます。

[参考文献]

亀田修一1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42－3

亀田修一2002「朝鮮半島古代山城の見方」編集代表西谷正『韓半島考古学論叢』すずさわ書店

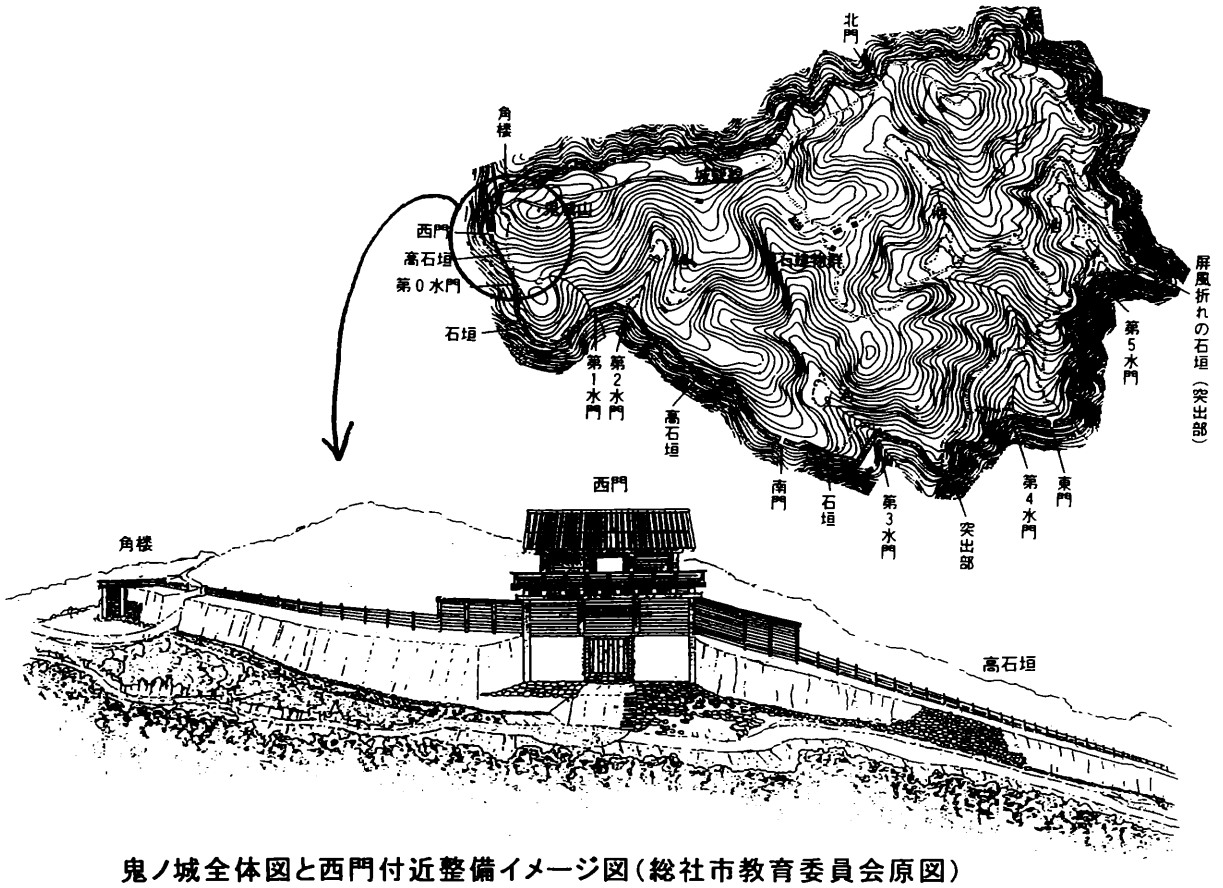


韓国：韓国考古学研究会 1984『韓国考古学地図』

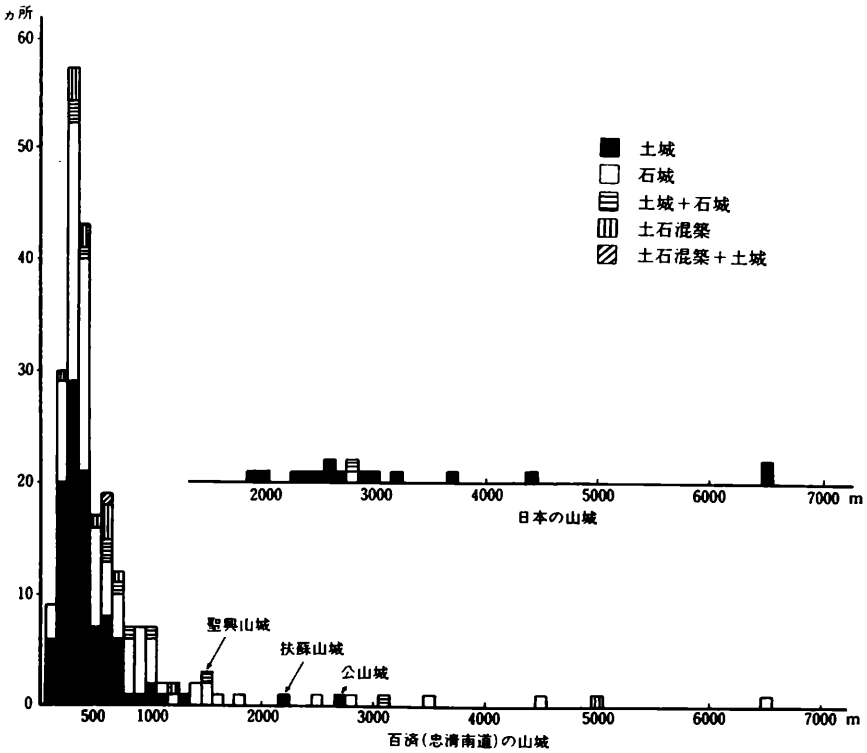
日本：向井一雄 2004「Ⅸ-2　山城・神籠石」
山中敏史編『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』

1 播磨城山城	7 御所ヶ谷城	13 帯隈山城	A 大野城	G 長門国の城
2 大廻小廻山城	8 宮地岳城	14 おつぼ山城	B 基肄城	H 常城
3 鬼城山城	9 高良山城	15 杷木城	C 金田城	I 茨城
4 讃岐城山城	10 雷山城	16 唐原城	D 屋嶋城	J 怡土城
5 永納山城	11 女山城		E 高安城	
6 石城山城	12 鹿毛馬城		F 鞠智城	

日韓古代山城の分布

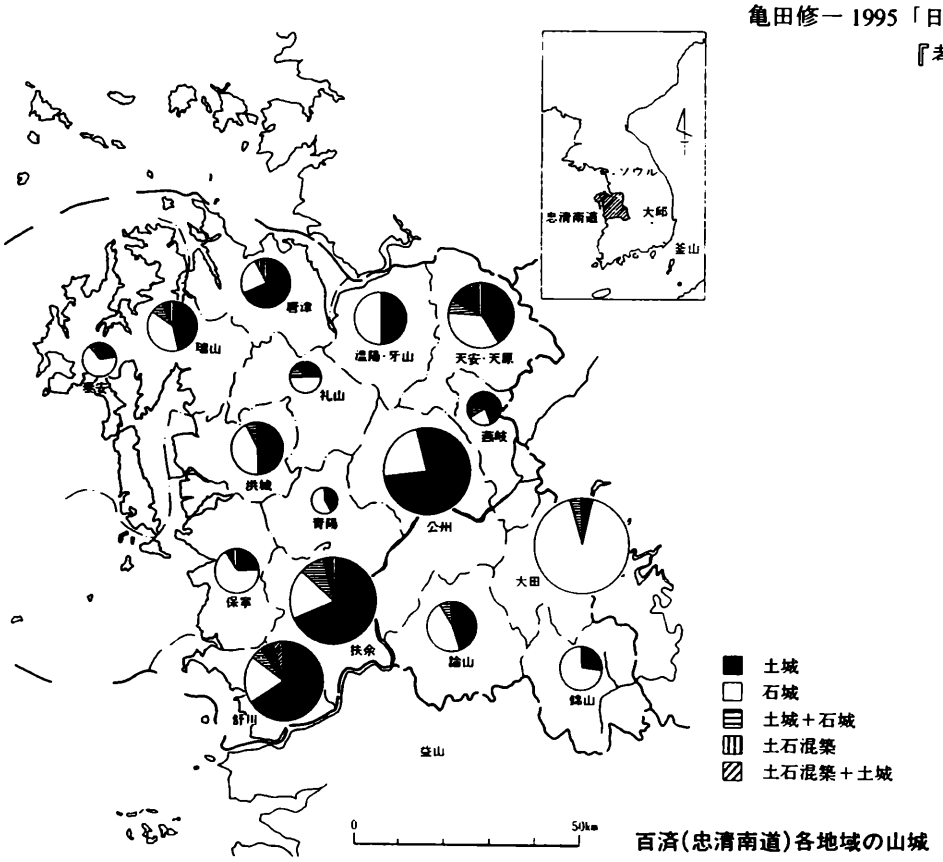


鬼ノ城全体図と西門付近整備イメージ図（総社市教育委員会原図）



百済と日本の山城の大きさと数

亀田修一 1995「日韓古代山城比較試論」
『考古学研究』42 － 3



百済(忠清南道)各地域の山城

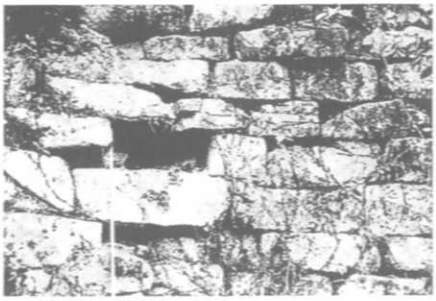
表1　百済(忠清南道)各地域の山城

種類＼地域	舒川	扶余	保寧	青陽	洪城	泰安	瑞山	唐津	礼山	温陽・牙山	天安・天原	燕岐	公州	論山	大田	錦山	合計
土城	14	15	3	3	7	2	6	9	2	7	7	4	16	6	1	3	105
石城	4	4	8	4	6	6	5	3	4	7	6	2	5	6	23	8	101
土城＋石城	1	2	0	0	1	0	1	0	1	0	1	1	0	1	1	0	10
土石混築	1	1	1	0	0	1	1	1	1	0	3	2	1	0	0	0	13
土石＋土城	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	21	22	12	7	14	9	13	13	8	14	17	9	22	13	25	11	230

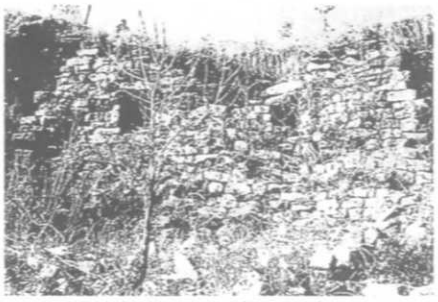
1．林川聖興山城南東部土塁横断面(中央の石が土塁外面のもの)（Ⅰ，Ⅱ類）

2．林川聖興山城南東部土塁外面石積み状況（Ⅰ，Ⅱ類）

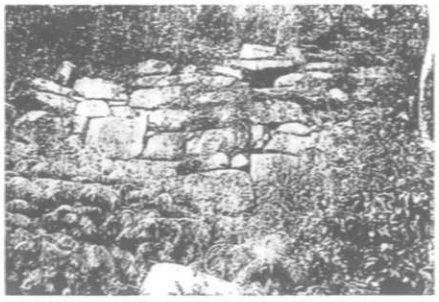
3．報恩三年山城水門跡（Ⅱ類）



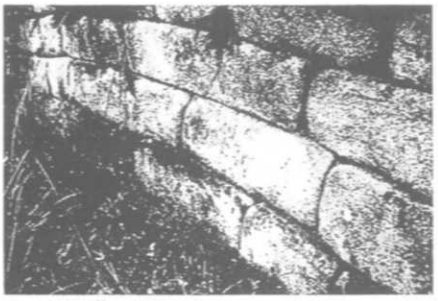
4．慶州南山新城(Ⅱ，Ⅲ類）



5．忠清北道城峙山城水門跡(Ⅱ，Ⅲ類）



6．備中鬼ノ城第５水門跡(Ⅰ，Ⅱ類）



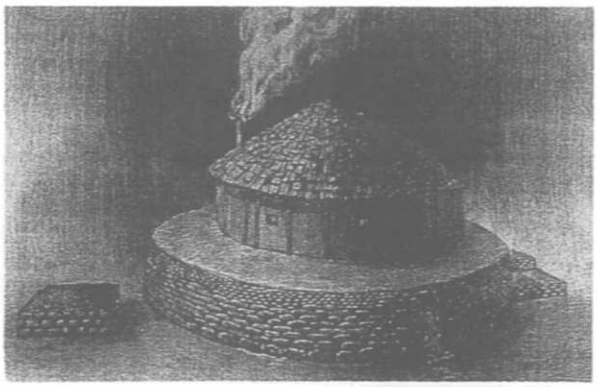
7．南原蛟龍山城（Ⅳ類）

8．豊前御所ヶ谷神籠石水門跡（Ⅳ類）

山城の石材

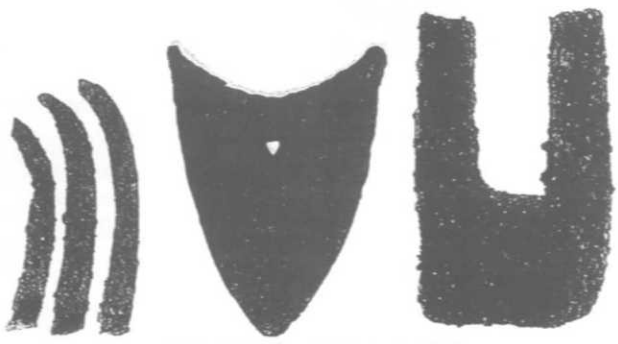
鉄矛最長28.9cm

5世紀頃の漢城地域　九宜洞報告書刊行委員会 1997
『漢江流域の高句麗要塞』



九宜洞堡塁復元模式図と出土鉄器

鉄鏃最長25.0cm

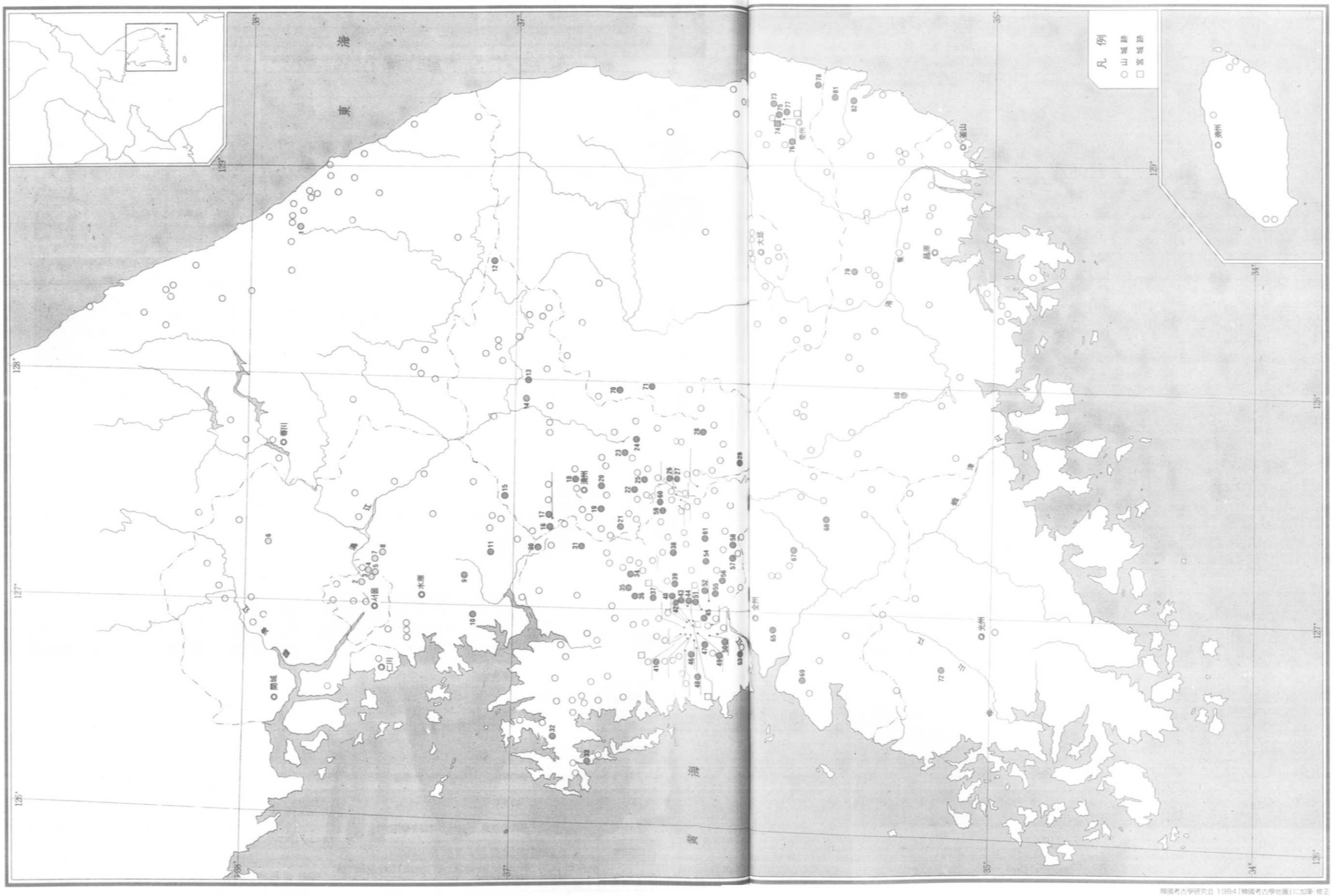


峨嵯山城第4堡塁出土鉄器
左：鎌最長31.6cm、中：犁高44.4cm、右：鋤高16.0cm
崔鍾鐸 2000『特別展高句麗』ソウル大学校博物館

古代山城関連記事

西暦	記事内容	出典
	狭穂彦、稲を積みて城を作る。これを稲城という。火を放ち、その城を焼く	『日本書紀』垂仁五年
	稲城を造りて待ちて戦う	『日本書紀』雄略一四年
587年	稲城を築きて戦う	『日本書紀』崇峻即位前紀
644年	家の外に城柵を作り、門の旁らに兵庫をつくる	『日本書紀』皇極三年
645年	法興寺に入り、城となして備える	『日本書紀』皇極四年
647年	淳足柵を造り、柵戸を置く	『日本書紀』孝徳三年
648年	磐舟柵を治す	『日本書紀』孝徳四年
658年	都岐沙羅の柵造に位二階を授く	『日本書紀』斉明四年
660年	粛慎おのが柵によりて戦う	『日本書紀』斉明六年
664年	対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国などに防と烽を置く。筑紫に水城を築く	『日本書紀』天智三年
665年	長門国に築城、筑紫国に大野・椽の二城を築く	『日本書紀』天智四年
667年	倭国に高安城、讃吉国に屋嶋城、対馬国に金田城を築く	『日本書紀』天智六年
669年	高安城の工事を中止する	『日本書紀』天智八年八月
同 年	高安城を修理し、畿内の田税を収める	『日本書紀』天智八年冬
670年	高安城を修理し、穀・塩を貯え、長門に一城、筑紫に二城を築く	『日本書紀』天智九年
672年	筑紫大宰、筑紫国の城を高く堀を深くして外敵に備える	『日本書紀』天武元年六月
同 年	三尾城を攻め落とす	『日本書紀』天武元年七月
同 年	高安城の税倉が焼失する七月	『日本書紀』天武元年
676年	天皇、高安城に幸す	『日本書紀』天武四年
680年	竜田山、大坂山に関おき、難波に羅城を築く	『日本書紀』天武八年
689年	筑紫に位記(辞令)を送り、新城を視察させる	『日本書紀』持統三年八月
同 年	天皇、高安城に幸す	『日本書紀』持統三年十月
698年	大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を修理させる	『続日本紀』文武二年五月
同 年	高安城を修理する	『続日本紀』文武二年八月
699年	高安城を修理する	『続日本紀』文武三年九月
同 年	大宰府に三野・稲積の二城を修理させる	『続日本紀』文武三年十二月
701年	高安城を廃する	『続日本紀』大宝元年
712年	河内国高安の烽を廃し、高見の烽と大倭国に春日の烽をおく	『続日本紀』和銅五年正月
同 年	高安城に行幸する	『続日本紀』和銅五年八月
719年	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停廃する	『続日本紀』養老三年
756年	怡土城を築く	『続日本紀』天平勝宝八年
772年	筑紫営大津城監を罷む	『続日本紀』宝亀三年

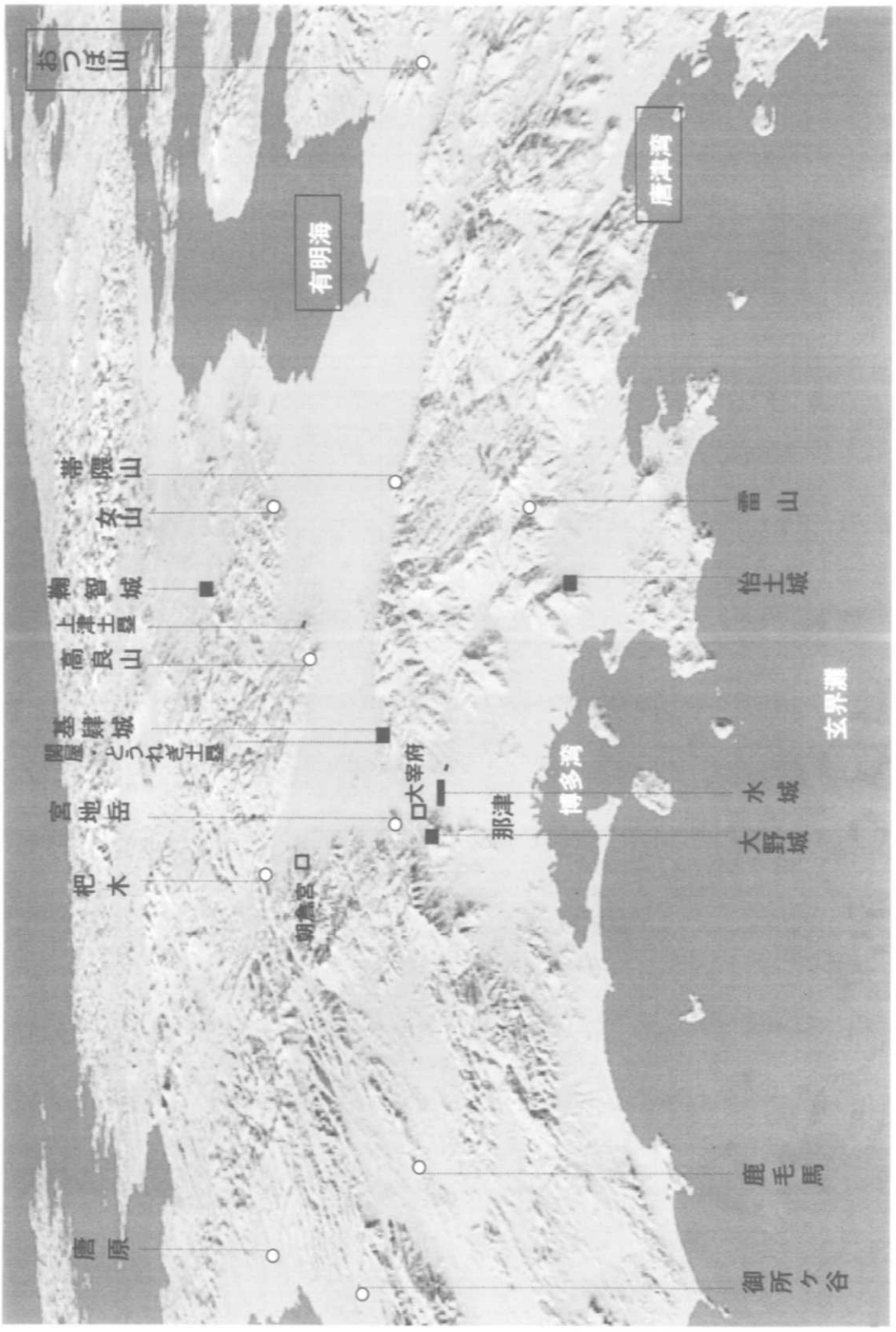
山城跡と宮城跡 —朝鮮半島—



韓國考古學研究会 1984『韓國考古學地圖』に加筆・修正

番号	地名	名称
1	江 原	大公山城
2	ソウル	阿旦山城
3	ソウル	風納土城
4	ソウル	陽井城
5	ソウル	夢村土城址
6	京 畿	半月城
7	京 畿	二聖山城
8	京 畿	南漢山城
9	京 畿	秀山城址
10	京 畿	吉城里
11	京 畿	舞陽城
12	忠 北	温達城
13	忠 北	大林山城
14	忠 北	南山城址
15	忠 北	望夷山
16	忠 北	萬時山城
17	忠 北	大母山城
18	忠 北	老姑城
19	忠 北	父母山城
20	忠 北	上黨山城
21	忠 北	猪山城
22	忠 北	文德里城址
23	忠 北	老姑城址
24	忠 北	三年山城
25	忠 北	虎岾山城
26	忠 北	老姑城
27	忠 北	環山城址
28	忠 北	摩尼山城
29	忠 北	大王山城
30	忠 南	蛇山城
31	忠 南	木川土城
32	忠 南	楡楂里山城
33	忠 南	達山里山城
34	忠 南	公山城
35	忠 南	丹芝里
36	忠 南	茂盛山城
37	忠 南	百濟羅城址
38	忠 南	鳳谷山城
39	忠 南	龍城
40	忠 南	里仁山城
41	忠 南	牛山城
42	忠 南	扶蘇山城
43	忠 南	半月城址
44	忠 南	青山城
45	忠 南	百濟王宮址
46	忠 南	論峙山城
47	忠 南	九鳳山城
48	忠 南	鳳凰山城
49	忠 南	青馬山城
50	忠 南	聖興山城
51	忠 南	扶餘羅城
52	忠 南	石城山城
53	忠 南	乾芝山城
54	忠 南	黄山城
55	忠 南	望華山城址
56	忠 南	烽火山城
57	忠 南	新興里山城
58	忠 南	城峯山城
59	忠 南	磁足山城
60	忠 南	新垈里山城
61	忠 南	鳳谷里山城
62	全 北	獐勒山城
63	全 北	岔山土城（普德城）
64	全 北	王宮里山城
65	全 北	城山城址
66	全 北	月溪里城址
67	全 北	徳川里城址
68	全 北	月坪里城址
69	全 北	馬延城址
70	全 北	城山山城
71	全 北	老姑山城
72	全 南	會津土城
73	慶 北	明活山城
74	慶 北	大宮址
75	慶 北	慶州月城（左城）
76	慶 北	西兄山城（仙桃山城）
77	慶 北	南山城（南山新城）
78	慶 北	關門城
79	慶 北	牧馬山城
80	慶 北	白馬山城
81	慶 南	伴頭土城
82	慶 南	華山里山城

山城跡と官衙跡 —九州—


おつぼ山
有明海
唐津湾
帯隈山
女山
鞠智城
上津土塁
高良山
基肄城
関屋・とうれぎ土塁
宮地岳
杷木
朝倉宮
大宰府
那津
博多湾
雷山
怡土城
玄界灘
水城
大野城
鹿毛馬
唐原
御所ヶ谷

KYUSHU NATIONAL MUSEUM

—日韓の古代山城を掘る—

福岡県教育委員会・大韓民国 国立文化財研究所 交流20周年記念

九州国立博物館 国際シンポジウム

編集
九州国立博物館
〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-2

http://www.kyuhaku.jp